目的合理的行為の二類型

――「鋼鉄の檻」の克服をめざして――

吉田　浩

一　初めに
二　シュムペーターにおける「一定条件に制約された経済の循環」と適応行動
三　シュムペーターにおける経済発展と創造的反応
四　ウェーバーにおける目的合理的行為の適応的性格
五　ウェーバーにおける静態的経済理論とその問題点
六　マルクスにおける経済革命と資本主義的生産関係の生産と再生産という視点
七　終わりに

一

マックス・ウェーバーが歴史の進展過程を合理化として捉えていたことは周知の所である。この多義的な概念の第一義的な意味内容は、呪術という科学では把握不能な非合理的要素が現世から後退していき、更にはそこから徹底的に排除されるということであった。だからこそウェーバーは合理化過程を、「世界の呪術からの解放」過程ともよんでいたのである。

このように合理化とは、社会と自然とから神秘的要素が決定的に廃棄されることなのだから、そのことによっ

て社会は一義的に明晰となってくることになる。だからウェーバーは、ひたすら透明に合理化された社会は人間によって全面的に認識されうるし、就中そこに貫徹している法則を洞察しえれば、未来に対して予測と計算とがなりたつようになってくると主張していたのである。

従ってウェーバーは彼の晩年の講演＝『職業としての学問』において、次のように述べていたのである。「欲しさえすれば、どんなことでもつねに学び知ることができるということ、したがってそこにはなにか神秘的な、予測しえない力がはたらいている道理がないということ、むしろすべての事柄は原則上予測によって意のままになるということ――このことを知っている、あるいは信じているというのが、主知化しまた合理化していることの意味なのである[1]」と。即ちウェーバーは、理性的認識と技術とによる、合理化された社会の支配と統御との全面的な可能性を主張していたのである。

以上に述べてきたことからして、既に合理化の第二の意味を確認しえた。それは主知化、知性化であり、総じて理性化ということである。そのことは具体的には、社会に貫徹している法則を明晰に洞察し、この法則に基づいて行為するということである。このようになされる行為が、理性的な行為類型であることはいうまでもなかろう。

ところがこれだけの主張であれば問題も少ないのだが、ウェーバーはここから更に進んで、法則への「徹底的適応」restlose Anpassung か、そうでなく行為した場合の社会的・経済的淘汰かという二者択一を主張してくるのである。つまり法則には適応するほかはありえず、そうでなければ淘汰によって社会的に排除されるというのである。

適応的側面に関しては彼は次のようにのべている。厳密に合理的な行為とは、「与えられた〝状況〟への率直で徹底的な〝適応〟であろう。たとえばメンガー理論のもろもろの図式は〝市場状況〟への厳密に合理的な〝適応〟を前提としてふくんでいる[2]」(傍点引用者、以下同じ)と。与えられた状況への徹底的適応とは具体的にはい

かなることであり、状況には適応的な行為しかなしえないのか否か、状況を変革するような他の行為類型もありえるのではないのか、これこそが実は本稿が検討せねばならない問題なのだが、さしあたり現段階では、ウェーバーが状況に対しては徹底的適応しかありえないと述べているこの事実を確認しておきたい。

その上で次にウェーバーは、経済的領域に貫徹していると彼が看做す固有の法則にはとりわけて適応するしかなく、そうでなければ経済的淘汰による没落を蒙むるといってくるのである。「競争戦における製造業者、取引所における仲買人にとっては、その『意思の自由』に対する信念は、はなはだ助けにならない。彼は経済的淘汰を受けるか、さもなくば、きわめて確固とした経済的行為の原則を遵守するかの二者択一に直面する」[3]、「誰人も市場に関連をもっている限り、この秩序は彼の経済行動に対してある規範を強制する。製造業者が長期間この規範に反して行動すれば必ず経済的淘汰を受けねばならず、労働者がこの規範に適応 anpassen しようとしない場合には、必ず失業者として街頭に投げ出される」[4]、等々と。

以上、法則に厳密に適応する行為こそが、合理化された、従って理性化された人間のとりうる唯一の行為類型だとウェーバーは主張しているのである。ところが他面においてこの徹底的な適応行動の至り着いた帰結に対しては、彼は実にペシミスティックであり、理性化の逆説としかいいようのない世界を描出してくるのである。即ちウェーバーは『プロ倫』の末尾において、大略次のような主張を展開していた。

外衣とは随意に脱ぎ捨てえる薄い外物であるはずなのに、「運命は不幸にも、この外衣を鋼鉄のように堅い檻としてしまった」[5]と。ここで外衣とは、近代資本主義の経済秩序と、ウェーバーが合理化の極点と看做す近代官僚制的組織のことだが、それらは近代的経済人の法則への一義的な適応的行為の結果、随意に変更しえる薄い外衣から、変革不能な「鋼鉄の檻」stahlharten Gehäuse へと転化してしまったというのである。のみならず彼は次のようにも論じていた。「この世界秩序たるや、圧倒的な力をもって、現在その歯単装置の中に入り込んでくる一切の諸個人――直接に経済的営利にたずさわる人々のみでなく――の生活を決定しており、将来もおそら

く、化石化した燃料の最後の一片が燃え尽きるまでそれを規定するであろう」[6]と。つまり「鋼鉄の檻」はそれが一度確立すると、こんどは近代人の運命を一方的に規定し続けるというのである。

この主張と、先の『職業としての学問』におけるウェーバーの見解とを、ここで改めて比較せざるをえないのである。一方では理性による社会の合理的支配の全面的可能性が指摘されていた。ところが他方では、理性的となった人間によって押し進められた合理化の極点において、今度は「鋼鉄の檻」に一方的に自己の運命を委ね決定されざるをえない、理性を徹底的に喪失した人間類型が現れてくるというのである。従ってウェーバーという同一の人間によってなされたこれら二類の主張の間に介在するこの巨大な落差をどう関係づけ、いかに解釈したらよいのかということが、深刻な問題となってこざるをえないのである。

加えてウェーバーは、「鋼鉄の檻」の下の人間類型＝「末人」letzte Menschen をあまりにも絶望的に、「精神のない専門人・心情のない享楽人・この無のもの」[7]として特徴づけていた。そして合理化され、理性化されたはずの近代社会のいたりついたこの逆説的事態に対するウェーバーの以上の見解が、他の様々の諸要素も加味されて、ウェーバーの物象化論、物象化としての合理化論として把握し直され、多くのウェーバー研究者によって鋭意検討されているのである。

ウェーバーのこの物象化論は、近代社会の根源的病理を鋭く剔抉しているがゆえに深刻に受けとめられるべきものであるのか否かという問題の検討をこそ本稿は課題とするが、さしあたりこの見解をそのまま受容するとすると、それは文字通り合理化の悲劇であり、近代化過程のパラドックスとしか形容しようがない事態だったのである。というのは、「人格的生のほのぐらい未分化の植物的底層」[8]に眠っていた前近代的自然人が、そこから決定的に離脱して理性的となり、禁欲的精神に徹した堅忍不抜のこの合理的人間が世界史上「空前絶後ともいうべき英雄的行動」[9]を発揮して、「呪術の園」という迷妄状態を突破し、理性の支配を全面的に可能とさせるはずの社会を構築しようと意図した行為の、この意図に反した、意図に対極する結果であったからである。だからこそ

この事態はまことにもって悲劇であり、近代化の逆説だといっているのである。

そこでウェーバーにより「絶対的物象化」、「隷従の容器」、「古代エジプトの再現」等々とも形容されている「鋼鉄の檻」という事態を克服し突破していくという試みが、我々にとり真摯な課題となってこざるをえないのである。但し克服の方向は様々のそれがありうるのであって、ウェーバーの「鋼鉄の檻」という近代把握そのものが正しいのか否かという問題が、まずもって俎上にあげられねばならないのである。私自身は「隷従の容器」という彼の見解は、近代社会の基本的特質を捉えそこなっており、その意味で誤謬だと考えるが、それにしてもこの見解が間違いであることを、本稿の全体を通して説得的かつ具体的に論証していかねばならない。

そこでこのための手掛かりを私は、ウェーバーが指摘するように、そもそも人間は法則には一義的にかつ徹底的に適応するしかありえないのか否か、抜本的に異なる他の行為類型も可能ではないのかという点に求めたいのである。もちろん私も、法則を発見しそれを洞察したら、法則に適応して行為することが、人間のとるべき合理的態度だとは思う。しかしながらその際、いかなる種類の、どの次元の法則に適応するのかということを、明確に区別し規定して検討せねばならないのである。この点を漠然とさせたままで、法則への徹底的適応ということだけを一般的に論ずるのでは、「絶対的物象化」という問題は解決しえないと考える。

つまり、古いそして次元の低い法則に代替する、新たなかつ次元の高い法則を発見して、それに適応して新機軸をうちたてるという行為は、単なる受動的な適応行為とは全く異なる、能動的な行為類型のはずなのである。この点を明らかとしておくために、ウェーバーが化石燃料に言及していた事実に鑑み、エネルギー問題を事例として利用することによって説明しておきたい。

化学反応 $C+O_2 \rightarrow CO_2+4$ 電子ボルトのエネルギーであり、核反応 U_{235} ＋中性子→核分裂生成物＋2億電子ボルトのエネルギーである。この二類の反応の際に放出されるエネルギー量の巨大な差異に注目せざるをえない。それは一と億のオーダーの差であり、実に一時間と一世紀のそれに匹敵するのである。従って核反応――これも

立派な法則である――を制御して利用しえれば、人類は以前のエネルギー供給の前提条件を抜本的に変革して巨大なエネルギーを入手することができ、そのことにより既存の社会は、よかれあしかれ飛躍的な変動を蒙むることは確実なのである。[10]

この事例からも判るように、適応といっても、どの法則、いかなる次元の法則に適応するかによって事態は根本的に異なってき、全く新たな次元が革命的に開かれてくることもありえるのである。従ってこの点を無視して、法則には一義的に適応しえるだけであり、その結果、自然法則の如き峻厳な法則の貫徹しきった、変革することの不可能な「鋼鉄の檻」のような社会が到来するにいたったなどと、安易にかつ一面的に結論してはならないのである。

そこで合理的行為といっても、二類の根本的に異なる行為類型を区別するシュムペーターの見解を手掛かりとしつつ、ウェーバーの主張する「鋼鉄の檻」の克服を試みたい。シュムペーターにとり「不断にふるきものを破壊し、新しきものを創造して、絶えず内部から経済構造を革命化する産業上の突然変更……。この創造的破壊の過程こそ、資本主義についての本質的事実」[11]であって、近代的経済秩序が変更不能な「隷従の容器」であるはずはありえず、まさにその対極であったのである。

同一の見解は一八四八年のマルクスの『共産党宣言』においても、既にして鮮明に確認しえるのである。彼はのべている。「ブルジョアジーは、生産用具を、したがって生産関係を、したがって全社会関係をたえず変革しないでは生きてゆくことができない。これに反して、古い生産様式を変化させずに維持することが、これまでの全ての産業階級の第一の生存条件であった。生産のたえまない変革、あらゆる社会状態のたえまない動揺、永遠の不安定と変動とは、ブルジョア時代を以前のいっさいの時代から区別する」[12]、「あらゆる固定した、さびついた関係は、それにともなう年ふりた貴い観念や見解とともに解体され、新しく形成された関係は、全て化石化するひまもないうちに古くさくなる」[13]と。ここでもまた、たえまない変革と革新、永遠の不安定と不確実性とによっ

て近代社会が特徴づけられこそすれ、それが無人間的で血の気のない、骸骨のように冷たい「絶対的物象化」であるなどとは、暗示すらされてはいないのである。

従ってシュムペーターとマルクスの見解をウェーバーのそれと対照させて検討せねばならないのだが、本稿ではさしあたりシュムペーター理論を前面に押し立てる。その根拠は第一に、シュムペーターの処女作＝『理論経済学の本質と主要内容』において彼が言及しているように、彼はウェーバーと同じ行為論的見地、即ち「方法論的個人主義」[14]に立脚して理論を構築しており、その意味で両者は比較しやすいからである。第二にその上で、シュムペーターはウェーバーのいう目的合理的行為を更に二分し、一義的適応行動と「創造的反応」[15]とに明白に区別していたからである。後者の行為類型を用意することによってこそ彼は、近代資本主義経済を「創造的破壊の過程の噴出と変転」[16]、「不連続な突進」[17]、「たえざる烈風の状態」[18]等々と、つまり「鋼鉄の檻」に対極する「動乱」[19]的事態として捉えることができていたのである。

最後に述べておきたいことは、「絶対的物象化」の超克の試みにおいて、多くのウェーバー研究者がなしているような、カリスマの超能力的威力に依拠するという途は、本稿は一切採らないということである。「鋼鉄の檻」の克服は真剣な試みであるべきはずであるのに、カリスマに依拠する方向は、安易で無内容でナンセンスであり、従って非科学的なそれだと考えるからである。なぜならば、カリスマといえども「隷従の容器」をいかにして克服しえるのか、また突破の後においてどのような社会が到来するのかという最重要な問題それ自体は、依然として未解決のままであり、解決へ向けて一歩たりとも前進してさえもいないからである。[20] マルクスの言葉を借用すれば、カリスマ革命論なるものは「髪の毛一筋でも目標に近づいたことにはならない」[21]からである。

(1) Max Weber,Wissenschaft als Beruf,in Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre（以下 W.L.と略記する）, J.C.B.Mohr,3. Auflage,1968,S.594.

(2) Max Weber,Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik in W.L.,S.227.
(3) Max Weber,Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Natioalökonomie,in W.L.,S.133.
(4) マックス・ウェーバー、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、大塚久雄訳、岩波文庫、五一頁。
(5) 同書、三六五頁。
(6) 同書、三六五頁。
(7) 同書、三六六頁。
(8) Max Weber,Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie,in W.L.S.132.
(9) マックス・ウェーバー、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、前掲訳書、一九頁。
(10) この事例は判りやすいので利用しただけであって、私自身は現状の原発には反対である。いわんやプルトニウムのリサイクルを意図する核燃料サイクル路線には、基本的に反対である。
(11) J・A・シュムペーター、『資本主義・社会主義・民主主義』、中山伊知郎、東畑精一訳、東洋経済新報社、上巻、一五〇～一五一頁。
(12) マルクス、『共産主義宣言』、国民文庫、三一頁。
(13) 同書、三一頁。
(14) シュムペーターは『理論経済学の本質と主要内容』で、「社会実在論」と「社会名目論」のどちらが正しいか否かにかかわらず、行為論的見地から社会現象を捉え説明するとうまくいくというだけで、行為論をとる自己の立場を「方法論的個人主義」とよんでいる。これに反して、個人の自由、個人の価値を何にもまして重視する立場を、「政治的」または「実質的個人主義」とよんでいる。「方法論的個人主義」という用語がシュムペーターの右の規定に発するものである限り、行為論的見地をとるウェーバーの方法を、それだけで「方法論的個人主義」と特徴づけるのは誤解を招く危険性がある。そのように規定している事例としては、例えばW・G・ランシマンの『マックス・ウェーバーの社会科学論』を参照されたい。
(15) J・A・シュムペーター、『企業家とは何か』、清成忠男編訳、東洋経済新報社、八八頁。
(16) J・A・シュムペーター、『資本主義・社会主義・民主主義』、前掲訳書、上巻、一九〇頁。
(17) 同書、一五一頁。

(18) 同書、一五九頁。
(19) 同書、五七頁。
(20) ウェーバーによって捉えられた「絶対的物象化」という事態を、カリスマによって突破しようとする試みに対する批判としては、拙稿＝「M・ウェーバーとルカーチの物象化論」(徳島大学社会科学研究第十一号、一九九八年)を参照してもらいたい。
(21) カール・マルクス、『賃労働と資本』、国民文庫、一二頁。

二

シュムペーターにおいて、合理的行為が更に適応的行動と創造的反応とに区別されねばならなかった根拠を解明するためには、彼の『経済発展の理論』の第一章の標題＝「一定条件に制約された経済の循環」が示している意味内容を理解せねばならない。シュムペーターにおける全ての問題はこの第一章に凝縮されており、問題の定立の仕方はその解決をも規定する。ところがこれらの問題群を、先の標題は端的に暗示しているのである。

ここで一定条件とは、二重の意味で把握されねばならない。第一は、自然現象、国家と社会組織のその時々の諸形態といった、そして科学・技術をも含む非経済的領域の諸現象である。第二は、先行の経済期間から受け継がれてきた財の量とその布置状況とである。これらの一定条件は、経済学者である、より厳密にいえば、経済史学者ではなく理論経済学者であるシュムペーターにとっては、「与件」Datumとして扱われる。与件とは、その存在は否定しえない事実ではあるが、しかしながら理論的には未解明の事実、つまり理論に内部化されてはいず、その意味で理論の外的前提条件として扱われ、存在論的に表現すれば、経済活動を行うための前提条件となる事実、これが与件である。

この意味での一定条件がシュムペーターにおいて与件と看做されるのは、彼が理論研究と歴史研究とを厳密に

分離するからである。彼は述べている。「われわれの研究しようとすることは、経済することがどのように歴史的に変化をしたかということではなくて、それが任意の一時点において、どのように現れるか、ということである。問題は、歴史的な発生ではなくて、概念上の再建である。これら二つの全然異なったことがらの混同は、非常にしばしばみられる誤謬である」[1]と。つまり歴史研究、就中、経済史研究の課題とは、経済活動のための諸条件がどのように歴史的に変動してきたかを解明することにある。理論研究の任務とは、先の意味での二重の条件を与件として、つまり所与の不変の前提とした上で、ある一定時点における経済構造を概念的に再建することなのである。そしてこれら二類の研究方向は全く異質のそれであって、交錯することはありえないとシュムペーターはいうのである。

理論研究と歴史研究との分離という彼のこの主張には、一定の理解を示すことができる。そもそも構造を再建しえないと、その構造の運動法則、従ってその歴史的変動も捉えれない。だからそのためにも、構造の再建のための独自な方法と理論がいるし、それらが歴史研究に先行して用意されていなければならないことも事実だからである。ところが構造総体を理論的に再建しおえると、今度はこの構造の運動法則を掴まえることが理論の課題となってくる。この次元では理論研究は歴史化され、歴史研究は理論化されて、両研究は一致してくると私は考える。

そもそもシュムペーター自身が、理論研究と歴史研究との分離という立場を堅持していたか否かという点に関して、疑問が残るのである。[2] しかしながら『経済発展の理論』の段階では、二類の方向は全く異質なものと看做されていたのであり、そこでこの分離の立場をそのまま受け入れて、経済構造の概念上の再建の方法に具体的検討を加えていきたい。その上で、新古典派経済学の見地から再建されたこの経済構造の問題性を確認していきたい。この構造には深刻な問題が宿るからこそ、シュムペーターはそれには満足しえず、適応的行動とは根本的に異なる「創造的反応」という新たな行為類型を設定せざるをえなかったのである。

概念上の再建の第一歩は次のようにして行われる。既述しておいた一定条件は、理論経済学者であるシュムペーターにとっては、不変の与件、経済活動のための不動の前提条件として扱われる。そのことは具体的には、この外的前提条件は、創造的反応という行為によって、より有利な、またはより優れた条件によって代替されることはありえず、だから単純に不変と仮定されるということである。前提条件が不変である限り、経済主体はそれに受動的に適応するしかあるえない。このことが、「一定条件に制約された経済の循環」という標題の意味を理解するための第一の論理的前提である。第二のそれは欲望の存在である。シュムペーターにとり「欲望」とは、経済主体の経済行動を引き起こす根拠であり、原動力である。欲望は充足されねばならず、そのためには欲望を満足させる財を獲得するか、無ければ生産するしかない。

このように所与の外的諸条件を一方に、経済主体の欲望を他方に前提して、この下で条件が許す限りでの極大的な欲望充足という観点からなされる行動が、経済主体の行う最適な合理的適応行動ということになる。この観点の下では、孤立経済においても、流通経済でも、各々の次元で唯一無二の極大的な適応行動が一義的に決定されることになる。そして条件が不変である限り、それ以上の最適行動はありえないのだし、それ以下の行動は最適ではないのだから、この極大値に到達すると経済はそこで自ずと固定するし、もはや変動の余地はありえないということになる。

その上でシュムペーターにおける理論の課題とは、この経済の極大的固定点における「経済生活の規則的経過」を捉え説明するということである。彼はこの規則性のなかに、「経済的事象に内在する論理」を見出しえるというのである。従って理論の課題とは具体的には、この論理を見出し記述し、そのことによりその時々の経済構造を再建するということである。この再建は更に次のようにしてなされる。

経済の目的が欲望充足にあることは既述しておいた。この欲望充足という観点から、経済財は経済主体に対する重要性、即ち価値を獲得する。シュムペーターにとり「価値とは、一定財の一定量が一定の主体に対して、し

たがって財に対する彼の行動に対して――もつ重要性の指標である」[3]。ところが財が価値をえれるのは、欲望を直接に満足させることのできる消費財だけである。しかし財としては、いま一つ生産財がある。土地用役、労働用役、生産された生産手段とがそれである。問題は、これらの生産要素は欲望との直接的対応を欠いているために、価値をえれないというこの事実である。但しシュムペーターはF・v・ウィーザーの帰属理論に従い、消費財の価値は生産財へと残りなく帰属されるというのである。

帰属は次のようにして行われるが、その際に問題となるのは「生産された生産手段」の位置づけである。シュムペーターはそれを一面では労働用役と土地用役とが体現されたもの、他面では潜在的消費財と規定して、生産要素としてのその独自の役割を否定する。かくして生産手段は再び労働と土地とに分解され、本源的な生産要素は労働用役と土地用役だけだということになる。その上でこの二要素のうち、労働を排他的に重視したリカード、マルクス的な労働価値説を退け、シュムペーターはこの二要素は生産において共に不可欠であり、同格だと看做すのである。従って両者には等しく価値が帰属され、その価値額は、各要素が生産においてなしたその貢献の程度に比例するというのである。即ち「各貢献は受領の前提であり、対応物であり、各受領には一つの貢献が対応している」[4]と。各貢献に対して受領される所得が、労賃と地代であることはいうまでもない。

以上に述べてきたことで確認しておかねばならない問題が三つある。その第一は、シュムペーターが「生産された生産手段」に対して独立の役割を否定したという事実である。「生産された生産手段」という質料的要素をそのまま資本と看做し、この資本が利潤の源泉となってそれを産出すると主張することは、『資本論』の「三位一体的範式」章の批判をまつまでもなく、何の根拠もない。従ってこの点ではシュムペーターはマルクスと軌を一にするのである。だから彼は述べている。「生産された生産手段が、完全な静態経済においても純利潤を生むということは、ほとんどすべての経済学者が今日なお信じているがごとくに争うべからざる事実ではない。……資本の純利潤に関するマルクスの議論は、迂遠ではあるが、このことを認識する一方法であると解釈することが

できよう」[5]と。だから何の証明をも欠いたままに、生産手段という質料的要素が利潤を創出すると断定してはならないのである。

このことの確認が第二の問題へと連動していく。その問題とは、これまでのシュムペーターの経済理論には利潤と利子とが欠けており、だからそれらを所得として受領する企業者と資本家という経済主体も存在していないという事実である。彼の帰属理論によれば、実現された商品の価値は残りなく労働用役と土地用役とへと帰属されるのだから、生産費をこえるプラスの余剰としての純利潤が経営者の手元に残る余地のないことは自明の理である。利子に関しては、そもそもそれを発生させる実体的根拠が欠如しているがゆえに、その存在を説明することができない。

かくして利潤も利子もその存在が否定される。しかし資本主義経済においては、利潤も利子も実在している。否、単に実在しているというだけではない。それらを獲得することこそが経済活動の原動力をなしており、従って利潤と利子とは、資本主義経済を他の経済体制から区別し際立たせる資本主義の種差をなしているのだ。ところが『経済発展の理論』の第一章で展開された静学では、この種差が捉えれない。しかし利潤と利子とが現存することは否定しえないのだから、それらを理論で掴まえかつ説明していかねばならない。そしてここにこそ、シュムペーターが第一章の静学には留まりえず、動学＝「革新の経済学」[6]を第二章以降において増築Zubauせねばならなかった最大の問題性と根拠とがあったのである。

静学における利潤の存在の否定ということは、シュムペーターでは生産局面から次のようにも説明される。そして実はこちらの説明の方がはるかに重要なのである。なぜならシュムペーターにおける経済発展、創造的破壊は、生産局面において生じ、従って彼はそれを「生産革命」[7]とも述べていたのだが、だからこそ静学と動学との差異を捉えるためには、また前者の問題性を洞察するためにも、生産に対する静学の説明を押さえておくことが決定的に重要となってくるからである。

シュムペーターは次のように述べている。「生産物の全価値がそのまま純収益となるのではなくて、さもなければ生産されたであろう他の生産物の価値に対するその価値の超過量のみが純収益となるのである」[8]と。つまり生産の考察では費用という問題が発生してこざるをえず、この費用をこえて存在する価値のプラスの差額分だけが純益をなすといっているのである。その上で費用を次のように規定している。「一つの財の生産において、結局、生産者の費用となるものは、さもなければ同じ生産手段によって獲得しうるであろう消費財であり、したがってこの選ばれた生産の結果、もはや生産することのできなくなった消費財である」[9]、「あらゆる生産は各種の使用可能性の間の選択Wahlを含み、つねに他の財の生産を断念することを意味するから、それは経済主体に対して、けっしていわば利益だけをもたらすものではない」[10]と。費用との関係で、「選択」、「選択行動」という概念が登場してきていることに注意せねばならない。

この種の費用概念は、オーストリア学派の近代経済学では「機会費用」とよばれ、それは次のことを意味していた。財を生産するためには手段が必要だが、この手段には、第一にそれは稀少にしか存在せず、第二に代替的用途をもっていて、様々の財の生産に用いることができるという二つの条件が付加される。そうだとすると、手段の稀少性のために望まれている全ての財を生産することはできないのだから、どの財を生産し、他のいかなる財の生産を断念するかという選択を各経済主体は迫られることになる。その場合、断念されたがゆえに犠牲となった財が、もし生産されていたとすれば我々に対して有していたであろう価値が費用をなすとシュムペーターはいっているのである。

以上、選択を行うことが必然だとすると、その選択は合理的ないし経済的でなければならない。ここから「合理的選択行動」という概念が出現してくるのだが、成果は極大であり、費用は極小となるように選択することが、最も経済的な行動であることはいうまでもない。そしてこの行為類型が、受動的適応行動のなかでは最も合理的な行為であったのである。またこの選択において発生してくるプラスの価値差額分が、利潤をなすとシュムペー

ターはいっているのである。

その上で主観価値説の側にたちつつ機会費用の立場をもとれば、いったいどういう結果となるのであろうか。利潤が存在する限り、選択された財はいっそう多く生産され続ける。ところが限界効用逓減の法則が強力に作用して、当該財の価値は低落していき、費用との間の価値差額は縮小していくのである。つまり「生産収益逓減の法則」、「費用逓増の経済的法則」が峻厳なまでに作用して、生産が停止すべき限界という意味での経済的均衡状態では、当該財の限界生産費と限界価格とは一致し、プラスの価値差額分は消滅してしまい、利潤は零となるのである。即ち機会費用概念を採用する限り、再び利潤の存在は説明できなくなるのである。

シュムペーターには、均衡状態という「国民経済がまさに最も完全な状態において利潤なしに動かなければならないということは一つの矛盾」[11]として映じた。矛盾は解決を迫り、解決されねばならない。そしてここにこそ、『経済発展の理論』の第二章以降における彼の動学的課題があったのである。

次に学説史に関する若干の論述を行って、第三の問題を確認していきたい。「全てを理解することは全てを許すことである」[12]という、研究者として誠実極まりない格言をモットーとしたシュムペーターは、ウェーバーとは異なりマルクスをも深く研究していた。そのことは彼の『資本主義・社会主義・民主主義』を一読すれば、即座に理解できることである。彼のマルクス研究は並のものではない。そのシュムペーターにして、彼の最終的なマルクス評価は「彼（マルクス――引用者）の理論の基礎は、それにもかかわらずまったく静態的性質のものである――それは古典派経済学の基礎にほかならないからである」[13]というものであった。古典派も経済発展について語りはするが、それは人口の増加、技術の進歩など、経済とは無関係に与件領域で規則的に生ずることが期待される変動が、経済に及ぼす影響を述べているにすぎないというのである。ところがシュムペーターの意味する「経済発展」とは、経済の内部から生ずる自発的変化のことであり、更には経済の前提条件を深刻なまでに攪乱して、それへの即座の適応を不可能とさせるような、質的断絶を伴う跳躍的変動のことだったのである。この

種の発展は古典派ではかって捉えられたことはなく、従って古典派の理論を自己の礎石としたマルクスの『資本論』も、静学を基本的特質とするというのである。

それだけではない。古典派以来の労働価値説を根本的に改造する限界革命が生じて、主観価値説が樹立されたが、にも拘わらず理論の静態的構造はそのことによっては何の変化も蒙らず、依然として理論の特質をなし続けたというのである。シュムペーターはワルラスの一般均衡理論について、「いかなる叙述といえども、ワルラスのそれよりいっそう静態的なものはない。われわれの科学の創始以来の経済の基本原理は、最も厳密な形で彼の手の中に結晶している」[14]と論じている。この静態的性格たるや、経済の一定条件に最適に適応しようとした場合、この一定条件が論理必然的に経済主体に課する「事物の必然性」[15] Sachnotwendigkeit によって堅く制約され、「鉄鎖」[16] eisernen Fesseln でもって人間は慣行の経済軌道に牢固として束縛されているようなそれだったのである。「事物の必然性」、「鉄鎖」という用語でもって、ウェーバーの「鋼鉄の檻」が想起されるべきであろう。

以上に論じてきたことを総括すると、シュムペーターのそれを除く全ての経済理論は、不変の一定条件への最適的適応の結果を考察する静学だということになる。ところが資本主義経済という現実は、烈風の吹き荒ぶ「動乱」状態であり、各経済主体は、自己の足下が瓦解しつつあるなかで、かろうじてまっすぐに立ち続けようと必死の努力を傾けつつ、熾烈な競争を闘っているのである。この「動乱」的事態が従来の理論では捉えられていない。そしてこれが第三番目の問題であり、動学の構築が必要とされる所以であったのである。

最後にL・ロビンズの『経済学の本質と意義』に言及しておきたい。新古典派経済学の見地をグロテスクなまでに純化して、ロビンズは経済学を「経済学は、諸目的と代替的用途をもつ稀少な諸手段との間の関係としての人間行動を研究する科学である」[17]と定義している。これだけでは不十分であって、「相対的価値判断の尺度」、つまり経済主体は、諸目的を重要度の差異に基づいて配列できる尺度をもっているという要素が付加されねばならない。

その上でロビンズは、代替的用途をもつ手段は稀少にしか存在せず潤沢にはないのだから、どの目的を実現し他のそれは断念するかという選択の問題に経済主体は直面せねばならなくなるというのである。そしてここに経済的問題が発生してくるというのである。従って経済学とは、回避しえないこの選択が最も合理的であり、その意味で経済的であるためにはいかに行動すればよいか、この課題に解答を与える学問だというのである。

ロビンズのこの見解は、既にシュムペーターの機会費用概念を検討した際に言及しておいたそれと同一のものであり、従ってロビンズの「合理的選択行動」も、静学を基礎とする受動的適応行動だということになる。この点を確認しておくのは、ウェーバーの経済的行為または目的合理的行為とロビンズのそれとは全面的に符節するのであって、だからウェーバーの目的合理的行為の性格の規定に際して役立つからである。

(1) J・A・シュムペーター、『経済発展の理論』、岩波文庫、上巻、三九頁。

(2) シュムペーターは『資本主義・社会主義・民主主義』で、マルクス理論の特徴の一つを、理論研究が歴史化され、歴史研究が理論化され、最終的に両研究が一致する点に見出し、それは理論上、もっとも優れた立場だと絶賛しているのである。この事実に鑑みると、彼が理論研究と歴史研究との厳密な分離という立場を最後まで堅持していたか否か、疑問が残るのである。

(3) J・A・シュムペーター、『経済発展の理論』、前掲訳書、上巻、四〇頁。

(4) 同書、三七頁。

(5) J・A・シュムペーター、『資本主義・社会主義・民主主義』、東洋経済新報社、上巻、五三頁。

(6) 吉田昇三、『ウェーバーとシュムペーター』、筑摩書房、一二一頁。

(7) J・A・シュムペーター、『経済発展の理論』、前掲訳書、上巻、一七三頁。

(8) 同書、上巻、七六頁。

(9) 同書、上巻、七六頁。

(10) 同書、上巻、七六頁。

(11) 同書、八三頁。
(12) J.Schumpeter,Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Natinalökonomie,Dunker &Humblot,Berlin,Vorwort,V.
(13) J・A・シュムペーター、『経済発展の理論』、前掲訳書、上巻、一五四～一五五頁。
(14) 同書、上巻、一五七頁。
(15) 同書、上巻、六五頁。
(16) 同書、上巻、三一頁。
(17) ライオネル・ロビンズ、『経済学の本質と意義』、東洋経済新報社、二五頁。

三

シュムペーターが、資本主義経済という現実を次のようにイメージしていたことは既述しておいた。「不断に古きものを破壊し新しきものを創造して、たえず内部から経済構造を革命化する産業上の突然変異……。この創造的破壊の過程こそ、資本主義についての本質的事実である。それはまさに、資本主義を形づくるものであり、全ての資本主義的企業がこのなかに生きねばならぬものである」[1]と。

即ち資本主義経済は第二章で論じておいたような静態経済では決してありえず、不連続な質的断絶と跳躍とが結果するような、経済的革命としての創造的破壊が連綿として継起している過程だというのである。そしてこの過程をシュムペーターは、「創造的破壊の過程の噴出と変転」、「不連続な突進」、「動乱」、「たえざる烈風の状態」等々とも表現し直していたのである。つまり彼のイメージする資本主義経済では、各々の経営者、事業主体は、不変と仮定された経済の外的前提条件に対して、どこまで最適に適応しえるかという点をめぐって競争しているのではない。そうではなくて、前提条件そのものに急激で激的な変革をもたらし与え、環境が一変するなかで、競争は深刻に展開されているのである。そしてこれこそが資本主義経済の現実の姿だというのである。

以上に述べてきたことは、資本主義経済に対してシュムペーターが懐く表象＝イメージである。だから理論研究の課題とは、これまで成功することのなかった、この表象に合致する動学的理論をいかにすれば構築しえるかということになる。以下この点を第一に、変革を捉えるための視点、二、変革主体の占める位置とその人格的特性、三、利潤問題の解決、四、完全競争モデル、自由競争モデルに対するシュムペーターの否定的評価が有する意義という順序で検討していく。

経済の固定性の対極をなす変動を捉え説明するためには、これまで不変と仮定されてきた経済の外的前提条件＝与件に攪乱を惹起させさえすればよい。そもそも経済の固定化は、不変と仮定された外的前提条件に一義的に適応したその結果なのである。この適応行動が、欲望充足という観点からは、所与の条件下では唯一無二の最適行動であるがゆえに、そこで経済は自ずと固定したし、静止する以外にはありえなかったのである。だから変動を説明しようとすれば、この前提条件を攪乱しさえすればよいのである。しかもこの攪乱が巨大で深刻であればあるほど、質的断絶と飛躍とを伴う非連続的結果が生じてくることもまた確実なことなのである。

シュムペーターには、この攪乱は単なる攪乱といったものではありえなかった。彼は、この攪乱が「起こること自体にすでに本質的な経済的現象が依存していると思われる限り、われわれはまずこの攪乱原因の理論を与えようとするものである」[2]と論じている。これは、J・B・クラーク、J・S・ミルに対するシュムペーターの批判なのである。彼らは静態に対する動態的事態の存在することを認めはした。従って動態を強調したのは何もシュムペーターが最初ではないのだが、彼らはこの経済的動態のなかに本質的な経済現象が内在していることを洞察することは全くなかったのであり、この看過をシュムペーターは厳しく批判しているのである。

次に変動一般は与件の攪乱から捉えれるとすると、与件に攪乱をひきおこす変革主体の存在が不可欠となる。この変革主体をどの場所に位置づけ、その人間類型はいかなるものであるか、これが第二の問題である。

まず前者の問題から検討する。先の意味での攪乱は、可能性としては、経済の内部からも、またその外部の与

件領域からも、外的前提条件に対して生起させることはできる。にも拘わらずシュムペーターは、彼における変革主体たる「企業者」を経済の内部に位置づけたのである。従ってその根拠は如何ということ、これが問題となってくる。この問題は、そもそもシュムペーターが動学の増築によりいかなる現象と問題とを掴まえ説明しようとしていたかを反省してみれば、自ずと解決される。これらの現象は、静学では把握しえなかった利潤と利子という動学的要素であり、問題は、それらを受けとる企業家と資本家という経済主体を理論体系内に位置づけるということであった。

これらの現象と問題が、経済的事実ではなく非経済的現象だと看做すなら、それらを惹起する変革主体は経済の外に位置づけねばならない。その逆に解釈するなら、変革主体は経済の内部に配すべきである。シュムペーターの選んだ途は後者であった。彼は「その現象を当然他の科学に譲渡してもよいのではないかどうか、ということである。だが企業者所得の場合には、後者の所論が妥当しないことは疑いないから、われわれは経済的説明を見出さねばならない」[3]と述べている。

加えて彼の意味での「経済発展」とは、経済の内部から生じてくる自発的変化のことである。そうであるならば、発展という経済的変革をひきおこす変革主体は、必然的に経済の内部に位置づかねばならなかったのである。以上が、「非経済の力」[4]そのものであるウェーバーのカリスマとは対極的に、シュムペーターが変革主体を経済の内部に配属した根拠である。

次にシュムペーターにおける変革主体＝企業者の特性描写へと移りたい。『経済発展の理論』の第一章における経済主体とは、与件に適応し、慣行の循環軌道にひたすら従う人間であった。そうだとすると変革主体は、外的前提条件には適応しない人間、つまり循環軌道から逸脱して、その外部にいるということになる。循環軌道とは、慣れ親しまれているがゆに確実な領域である。その外とは、不確実と危険とが充満しており、寄るべき行動の準則のない未知の世界である。循環軌道内の日々の任務をなしおえた後、なおかつ力の余剰を残して外部世界

へと移行しえ、そこに特有の危険を歯牙にもかけないという特性、これが変革主体に求められる。

更にこの主体は、外的前提条件を深刻に攪乱しはするが、それは決して単なる攪乱ではありえない。「創造的破壊」という用語からも判るように、古き前提条件を破壊し、より優れた、より有利なそれによって代替するという意味での攪乱でなければならない。この種の変革を、圧倒的多数の人間がその可能性さえ認識しえていない段階で洞察し、就中、この可能性を現実化すること、こうした洞察力・意志力・実行力が変革主体には求められる。しかも新しいことを遂行すれば、出る杭は打たれるのが世の常である。だからこのことを意に介することのない精神的豪胆さも要求されてくる。

以上の如き資質と特性とをシュムペーターの変革主体は具備していなければならない。だからこそ彼の意味での「企業者」Unternehmerとは、優れて衆に秀でる異能者でなければならなかったのである。

第三の課題は、静学では捉えれなかった諸現象を、シュムペーターが革新の経済学の増築によっていかにして捉え、説明しえたかという問題である。動学で解明されるべき諸現象は多岐にわたるが、紙数の関係上、企業者利潤の発生に関するシュムペーターの分析に焦点をしぼる。

「企業者利潤は費用超過額である」[5]ということは確かである。この費用超過額を、マルクスのように、資本の生産過程における労働者階級の無償の剰余労働にその源泉を求めることなく捉えること、またリカード派社会主義者のように、労働者の労賃からの控除に、即ち労賃契約の不正にその根源を帰属させることなく説明すること、これがシュムペーターの課題である。

そのために彼の導入したビジョンが、企業者による「生産要素の新結合」の遂行、総じて「広義におけるあらゆる生産過程の変更」、「生産革命」というそれだったのである。その場合、注意すべき点は次のことである。生産要素とは、土地用役、労働用役、そして生産された生産手段とだが、生産要素の新結合において利用される要素とは、従来から存在しているそれだということである。つまりシュムペーターに従うと、生産とは生産諸要素

を結合することであり、この結合を従来とは抜本的に異なり、これまでは想定外であった画期的な結合に変えるということが生産革命の内実をなすのだが、利用される生産諸要素自体は、どこまでも既存のそれなのである。

この新結合は、以前の生産技術と対比して圧倒的に斬新かつ非連続であればあるほど意義を有し、またそうでなければならないのである。なぜであるか。第一に、一人の企業者が他の同業者がそれには即座に適応できないような生産革命を実行して、既存の商品をはるかに安価な費用で生産することに成功したとする。その場合、この商品の価格が従来の水準を維持するか、低い費用のそれへと下落するか、このことが決定的に重要となってくる。この点シュムペーターは、革新者たる一人の企業者を除き、全ての同業者が旧来の方法で生産を続ける限り、当該商品の価格は以前の水準を維持すると考える。その限りにおいて、この企業者の手元には費用をこえる価値超過額が生じ、それはこの企業者に利潤として帰属するのである。

第二に、費用も高くつくが、しかしはなはだ魅力があるがゆえに需要が殺到する画期的な新商品を生産する技術革新に成功したとする。この時にも、この高い費用をこえるより高い価格が実現して、再度かのプラスの価値差額が発生してき、それもまた利潤となってこの企業者に帰属するのである。

いずれにしても、他の経済主体の即座の適応が絶対に不可能な生産革命が遂行されねばならない。多数の経済主体の瞬時の適応が可能なような微分的変動であれば、企業者は自己にのみ有利な独占的地位を保持しえない。従ってかのプラスの価値差額分も生じてこないのである。ここにこそシュムペーターが、彼の主張する「創造的破壊」の内実を鮮烈なまでの断絶と跳躍の過程として規定した根拠があったのである。

「企業者」[6]とはこうした類の生産革命の担当者だから、シュムペーターにより「経済界の革命児」と看做されたのである。彼は述べている。企業者は「そのうえ合理的……である。なにしろ彼は、他人が完成されたとみなすものをなお改作せざるをえない。彼は私経済的合目的性の方向に経済生活を改組する動輪である。」[7]と。この引用文では二つのことを確認しておかねばならない。第一は、シュムペーターでは変革が生ずべき方向は明白だとい

うことである。アトランダムに革命が生じて、新たな事態が開かれればよいというものでは決してなかったのである。「私経済的合目的性の方向」に経済を改組せねばならないのである。この方向は資本主義的現実に合致しており、無根拠な主張では決してない。

第二に、シュムペーターは先の引用文で、企業者は「そのうえ合理的」であると論じていたが、この「合理性」とは、既述しておいた「合理的選択行動」のそれとは根本的に異なるということである。合理的選択行動とは、経済の外的前提条件は不変と仮定した上で、各種用途間への生産諸要素の無駄のない効率的な配分の仕方を決定しているにすぎず、それは典型的な受動的適応行動なのである。ところがシュムペーターの企業者の合理性とは、不変であった前提条件に抜本的変革を惹起し、画期的な新機軸を樹立して、飛躍的に優れた、またはより有利な方向で生産するということなのである。この意味での合理性が、合理的選択行動のそれとは類型を基本的に異にしていることは明らかであろう。従って「合理的経済行動」、「目的合理的行為」といっても、二類の場合を厳密に区別して用いないと無意味だということを、先のシュムペーターの引用文から確認しておかねばならないのである。

第四の問題は、従来の完全競争モデルに対するシュムペーターの辛辣な批判が有する意義に関係する。それは、既存の経済理論に対するシュムペーターの批判的評価に連動する問題であって、この点は前章でも検討した。本章では、資本主義経済における競争の真の姿という観点から、再度、学説史を検討し直しておくのである。シュムペーターは、企業者利潤には独占の要素があると主張してくる。「かくして、成功した革新者に対して資本主義の与える褒賞たる企業者利潤のなかには、真性の独占利潤の要素があること、もしくはありうることは真理である」[8]と。そこでこの主張を手掛かりとして、第四番目の問題を考察していきたい。

シュムペーターが企業者利潤には独占的要素があると指摘する背景には、新古典派経済理論において支配的であった完全競争モデルがある。そしてこのモデルとの対比で眺めたときには、企業者利潤には独占的要素がある

といわざるをえなくなると彼は看做しているのである。この完全競争モデルをシュムペーターは「マーシャル＝ヴィクセルの図式」ともよび、『経済発展の理論』では、単に「自由競争」といっていた。そこでこの完全競争モデルとはいかなるものであり、それとの対比では企業者利潤はなぜ独占の要素をおびてくるのか、このことが問題となってこざるをえなくなる。そしてこれは、単なる好奇心の問題といったものではなくて、実に事態の核心をなすそれなのである。

シュムペーターは完全競争モデルを次のように特徴づけている。「経済理論がその目的のためにつくった完全競争という血の気のない概念は、個々の企業者が自己独力の行動によってその生産物と費用因子との価格を動かしうるか否かの問題に決定点を求めている。もしかれらがそうなしえない場合――すなわちもしおのおのの企業が大洋のなかの一滴の水にも比すべく、現行の市場価格を受けとるだけしかできない場合――には、理論家はこれを完全競争と名づける[9]」と。

つまりこういうことである。完全競争モデルでは、例えば下町の町工場のような、中・小のとるに足りない企業しか存在していず、大企業は皆無なのである。即ち個々の企業は、「九牛の一毛」のような微小な存在なのである。このような状況においては、個々の企業が生産においていかに創意工夫をこらしたとしても、それらの企業は「大洋のなかの一滴の水」の如き存在でしかないから、生産する商品の価格にも、その費用にも、何の変化・変動をももたらすことはないのである。いわんや経済革命を遂行して、既存の経済構造全体に深刻なまでの影響を及ぼすことなど、万が一にもありえないのである。

従ってこの図式では、経済の諸条件に変革をもたらして、一人だけ決定的に優位な独占的条件の下にいるような経済主体は皆無なのである。そしてこの種の独占状態に位置する者は皆無だという意味で完全に平等な条件の下でなされる競争、これがマーシャル＝ヴィクセルにおける完全競争であり、自由競争だったのである。だからこの完全競争モデルでは、自己の創造的反応によって経済の諸条件に革命をもたらすような者は皆無なのだか

ら、経済主体のとりうる行動は、市場価格が経済外的要因によって変化してもしなくても、その時々の価格を所与として受けとり、この市場価格に一義的に適応する受動的な反応だけだということになる。そしてこのモデルとの対比では、「創造的破壊」という自己の行為によって、他者に比して決定的に優位な立場にたっているシュムペーターの企業者は、独占的要素をもつということになるのである。彼が企業者利潤には独占的要素がつきまとうというのは、この意味においてなのである。

この点を以上のように明らかとしておくと、資本主義経済における競争の真の姿とは、およそ完全競争モデルの描写するような牧歌的なものではありえないということになる。同等な条件下で競争が行われると看做すのが、完全競争モデルである。しかしそれは現実の姿ではない。「この新生産物や新方法は旧生産物や旧方法と競争するが、この競争たるや、同等の条件で行われるのではなくて、古いものには死をもたらすがごとき決定的に有利な条件のもとで行われるのである」[10]。つまり能力と意志のある者は創造的破壊を成就しているという、この決定的に不平等な条件の下で鮮烈な競争が展開されており、だから「古いものには死をもたらす」競争、これが資本主義の競争の現実の峻厳なる姿だということになる。それゆえこの競争はまた、「現存企業の利潤や生産量の多少をゆるがすという程度のものではなく、その基礎や生存自体をゆるがす」[11]が如き、企業の生き死にを賭けた類の、深刻なまでの生存闘争だということにもなってくるのである。

以上、シュムペーターの描く資本主義的競争は、企業者によって経済の諸条件に急激な変革がひきおこされているという条件の下で展開されている点にその本質がある。だからそのことを通して生起してくる「経済発展」は、益々、経済の内部から惹起してくる自発的変化という性格をおびてくるのである。即ちシュムペーターによると、資本主義的企業の発展と技術的進歩とは全く別個の独立的要因であって、両者がたまたまあい合っして、生産量が拡大されているのではない。その逆であって、前者が後者を必然的に促し、そのことにより生産量を拡大し、商品の品質を向上させ、画期的な新商品を開拓し、費用を激的に低下させているのである。つまり資本主

義的企業の展開と技術革新とは「同一無二の事柄」one and the same thing であり、またそう捉えねばならないのである。だからこそシュムペーターのいう経済発展は、いま一度、内発的で自発的変化という性格を強め、この点では、マルクスが『経済学批判』の序文で定式化していた史的唯物論の見地にぴったりと符節していくのである。

ところが新古典派経済学の完全競争モデルでは、この類の自発的変動が経済において生ずることはありえないのである。もちろん政治的要因や、ウェーバー的にいえば宗教的要素が経済の外的前提条件を変化させて、そのことによって経済が既存の循環軌道に変動を蒙むるということはありうる。しかしこの場合は、他律的に生じた変動に経済が一義的に適応した結果でしかなく、それは自発的かつ内発的に生じた経済発展ではありえないのである。この点の洞察は極めて重要であって、ウェーバーのエートス論との関係で後に再論する。

最後に「完全競争」モデルに対するシュムペーターの批評に一言ふれておきたい。第一に、それは資本主義的現実の競争からはるかに乖離した、非現実的でユートピア的なモデルなのである。非現実的な極限型としての理念型をつくったとしても、そのことによっては、現実は理念型的内実とは異なるということが理解しえるだけであって、現実自体に対する認識は一歩も前進することはない。

第二にそれは、ただに非現実的であるだけではなくて、劣等なモデルでもあるのである。確かに条件は不変だという前提の下で、完全競争モデルは稀少な資源の最も合理的で効率的な使用の仕方を教えてくれはする。しかしこの条件はつねに変動しているのであり、資本主義の躍動するエンジンとは、巨大企業による永続的な生産革命を通した、大量生産と大量消費とにこそある。そしてそのことにより、イギリス女王だけの特権であった絹靴下を、一般大衆が使用できるまでに安価に普及させることにこそある。こうなるための前提条件の抜本的な変革を何ら認めず、固定した同等な条件の下での競争にのみ固執する完全競争モデルは、だから劣等なそれだということにもなるのである。

(1) J・A・シュムペーター、『資本主義・社会主義・民主主義』、東洋経済新報社、上巻、一五〇～一五一頁。
(2) J・A・シュムペーター、『経済発展の理論』、岩波文庫、上巻、一六八頁。
(3) J.Schumpeter,Wesen und Hauptinhalt der theoretischen Natinalökonomie,Dunker & Humbloto,Berlin,S.323.
(4) マックス・ウェーバー、『支配の社会学』Ⅱ、世良晃四郎訳、創文社、四〇二頁。
(5) J・A・シュムペーター、『経済発展の理論』、岩波文庫、下巻、九頁。
(6) 同書、上巻、二三三頁。
(7) 同書、上巻、二四〇頁。
(8) J・A・シュムペーター、『資本主義・社会主義・民主主義』、前掲訳書、上巻、一八五頁。
(9) 同書、中巻、三三四頁。
(10) 同書、上巻、五七～五八頁。
(11) 同書、上巻、一五三頁。

四

マックス・ウェーバーについては、二側面から彼の理論を検討する。第一は、ウェーバーの方法論的研究に属する諸見解であり、第二は、彼の経済理論そのものである。いずれについても、シュムペーター的にいえば、受動的適応行動をこえる「創造的反応」に対応する行為類型がウェーバーに用意されているか否か、またこの反応から生じてくる動学的現象に対する独自な考察が、ウェーバーに存在しているか否かを吟味していくのである。本章では第一の側面を検討する。

方法論的には行為論的見地をとるウェーバーにとり、人間の行為の解明可能性が死活の問題となってくる。彼は「ロッシャーとクニース」で、クニースをはじめとする浪漫主義の見解を批判しつつ、行為の理解可能性を論証するとともに、その延長線上において、経済法則への適応かそれとも淘汰かという二者択一を設定してくるの

である。クニースの見解は次の如くである。自然現象には因果法則が貫徹しており、従ってこの法則を洞察すればそれには予測がなりたち、その意味での計算可能性が成立する。その上でクニースは、自然現象のこの特質に対して、「人格の自由」を対極的に対置するのである。即ち人格の自由とは、因果法則には服さないということ、だから何が出来るかが予測できず、この種の計算不能という意味での非合理性という点にあり、だから人格は謎であって、それに対する解明はただに不可能であるのみならず、ここにこそ精神科学の尊厳性が位置している、と。

これに対してウェーバーは自然的事態、即ち「自然のままの出来事」[1]を、「人格的生のほのぐらい未分化の植物的底層」[2]と等値すると共に、「人間の行為の自由」、「意思の自由」をそれに対極的に対置させるのである。「自然のままの出来事」とは、歴史過程のなかで合理的に変革される以前の、だから歴史の結果ではなく、その前提となる状態のことである。この状態の下での人格とは、気分と気質、激情と衝動とのままに無軌道に行動し、外的刺激には無反省に直接的に反応するが如きそれであって、この種の非合理的状態を人間は「動物とすっかり共にする」[3]のである。そしてこの「自然人」の行動は解明も理解も不可能であり、だからそれはひたすら精神物理学の対象となりえるだけだというのである。

その上でウェーバーは、人間の行為と意思とが自由となるということは、人格がかの自然状態から脱却して規律化され、合理化されることだと捉えるのである。その結果は、以下の如き人格の出現ということになる。第一に、目的―手段関係の樹立に際して、法則論的、科学的知識をますます導入して、目的を合理的に実現しようと努める人格である。第二は、自己の信奉する究極的価値理念を明晰に自覚し、それに定位した体系的で首尾一貫した人格である。この種の人格は充分に解明可能であるのみならず、解明不能な自然現象を対象とする自然科学に比して、社会（科）学を決定的に優位とさせる特質であるとさえウェーバーはいうのである。

クニースを含む浪漫主義的見解への以上の批判の結論としてウェーバーは、「競争戦における製造業者、取引

所における仲買人にとっては、その『意思の自由』に対する信念は、はなはだ助けにならない。彼は、経済的淘汰を受けるかさもなくばきわめて確固とした経済行為の原則を遵守するかの、二者択一に直面する[4]」と主張してくるのである。ここで確認しておくべきことは、恣意的に行為する自由か、経済法則の遵守、即ち経済法則へ適応する行為かという二者択一が迫られることはあっても、シュムペーターのように、合理的行為にも受動的適応行動と創造的反応という二類型があり、合理性という観点からは後者の方が一層優れているということが、ウェーバーにおいて気づかれてさえもいないということなのである。従ってウェーバーでは、目的――手段関係に対して合理的な行為とは、法則または所与の状況への一義的適応行動だけであったということになるのである。

「客観性」論文では以下の二点を確認しておきたい。ウェーバーは「経済現象の心理的な解釈として、いままでにあらわれており、部分的にはかがやかしい将来を約束している理論[5]」と論じている。彼のいう「経済現象の心理的な解釈」とは、主観価値説に基づく新古典派経済学のことであり、この経済学には輝かしい将来が約束されているといっているのである。このことは、ウェーバーが限界主義経済学を並々ならず評価し、経済理論としてはそれを自己の立場として用いていたことを意味している。

第二にウェーバーは次のようにも論じていた。「大多数のばあいに人間の努力の目的となるものはすべて、この意味において何ほどかの『犠牲をはらう』ものであり、ないし犠牲をはらうことがありうるのであるから、責任をもって行動する人間が自己反省をするばあいには、その行為の目的と結果との交互の秤量ということなしにすまされるものではない。したがってこのような秤量ができるようにするということがこれまで考察してきた技術的な批判というもののもっとも本質的な機能の一つなのである[6]」と。手段が稀少である限り、望まれている目的の全ては実現しえず、断念という意味で犠牲となる目的がでてこざるをえないことは機会費用概念から既に学んだ。従って成果とはただそれだけのものではなくて、必ず犠牲を伴うのだから、目的と結果との厳密な秤量を行うことが責任ある態度だと、ウェーバーは機会費用概念に基づいて主張しているのである。ここでも再度、彼

がオーストリア学派流の新古典派理論を採用していたことを確認しえる。

以上の二点を確認した上で、これらの引用文を含む「客観性」論文全体においても、シュムペーターの「創造的反応」に対応する行為類型は、全く見出すことができないということも述べておかねばならないのである。シュムペーターは単なる新古典派経済学者ではなかったのであり、それを基礎としつつ動学を増築したのである。そしてそのことは、「創造的反応」という行為類型の設定によってのみ可能となったのである。この種の行為類型が、「ロッシャーとクニース」でと同様に、「客観性」論文のどこにも見出しえないのである。

「社会学の基礎概念」では、「目的合理的行為」の特性を確定することから始めたい。ウェーバーは次のように述べている。「あるひとが目的、手段および随伴結果とのかねあいでその行為を方向づけるとしたら、そのひとは目的合理的に行為していることになる。そういうばあいには、かれは、目的にたいする手段、随伴結果にたいする目的、はては種々可能な目的相互の関係をも合理的に考量するのである」[7]と。即ち「目的合理的行為」とは第一に、目的と手段との最適関係を樹立して、目的を無駄なく実現する行為である。第二に、目的と随伴結果、つまり犠牲との間も比較して、目的が実現するに値するものか否かを事前に検討しておくというのである。第三に、種々の諸目的をも比較して、どの目的を優先的に実現させるかをも、事前に決定しておくというのである。以上の三類の特徴を有する「目的合理的行為」が、L・ロビンズの理論を通して確認ずみの「合理的選択行動」そのものであることは、否定できない事実である。

この事実から洞察しておかねばならないことは、合理的選択行動そのものである目的合理的行為とは、受動的適応行動だということである。実際この行為に関するウェーバーの概念規定のなかには、それを更に二分して、より高次の合理的行為を設定しえるような可能性は暗示すらされてはいないのである。

第二に、ウェーバーには創造的反応が用意されてはいないのだから、状況への一義的適応をその基本的特徴とする目的合理的行為の結果は、ある均衡点への接近ということになる。このことは既に第二章で確認しておいた

し、それが適応行動の特徴をもなすのだが、均衡への接近、従って動学的事態の対極たる堅固な静態的事態の出来ということが、「社会学の基礎概念」において明瞭に確認することができるのである。

ウェーバーは次のように論じてくる。「市場関係者たちがよりいっそう厳密に目的合理的に行為すればするほど、所与の状況にたいする反応はますます似かよってくる。このように反応することによって、かれらの態度や行為は一様なものとなり、規則性をおび、持続性をもつようになる」[8]と。状況の革新は問題たりえず、それへの一義的適応が重要である限り、この観点からは唯一無二の最適行動しかないのだから、それが一度みいだされると、全ての人間の経済的行為は一様性をおび、規則性をもち、この均衡点で固定的持続性をえることは自明のことなのである。但しこの均衡点はいかなる時点かということが、ウェーバーでは全く判然としない。この点、シュムペーターでは明瞭であった。それは、同一の労働用役、同一の土地用役には、社会全体において同一の価値額が帰属されるということである。そのことは新古典派では、資源が最も効率的に使用されたことを意味していた。加えてこの均衡点は、利潤が零という状態でもあったのである。

ウェーバーは先の引用文に続けて次のようにも論じている。「自分や他人のむき出しの利害状況への方向づけは、規範の設定をつうじて強制力をおよぼそうとする――そうやったところで、徒労におわることがじつに多いのだが――のと同様の結果をもたらすものである。こうした現象は、とりわけ経済の分野でひじょうな注目をひいたのであった」[9]と。この事態も第二章で確認済みなのであって、所与の状況への適応だけが問題である限り、最適行動は「事物の必然性」に規定されて唯一無二のそれしかないのだから、そこに到達すれば、経済は自ずと堅固な固定性をもって停止せざるをえないということは既述しておいた。ウェーバーもこの事態に到達すれば、強制スタッフを具備して法の履行を迫る強制的状態にも匹敵するが如き拘束的均衡点が、強制スタッフを全面的に欠如させている経済の真只中において生起してくるといっているのである。この均衡点は変動の余地を全面的に欠如させているがゆえに、「鉄鎖」、「鋼鉄の檻」とよばれるのが最もふさわしいのである。

以上に論じてきたことに基づいてウェーバーは、行為を合理化するということは「習い性となった習俗への内的順応を利害状況への計画的な適応 planmäßige Anpassung によっておきかえることである」[10]と述べて、状況への適応ということを強調しはしても、この状況を突破して、はるかに有利で、抜本的に斬新な新事態を開拓するという視点は全面的に欠落させていたのである。受動的な目的合理的行為は、劣等な行為類型であることを洞察することもなく。但し既述しておいた経済的行為の規則性は不安定だということは、ウェーバーも強調してはいる。しかしながらこの不安定性とは、「創造的破壊」によって惹起されるそれではありえず、「正当性の信念」をかの規則は欠いているがゆえに生じてくる不安定性でしかなかったのである。

最後に『職業としての学問』におけるウェーバーの合理化＝主知化という見解を検討しておきたい。ウェーバーは次のように論じていた。「それを欲しさえすれば、どんなことでもつねに学び知ることができるということ、むしろすべての事柄は原則上予測によって意のままになるということ――このことを知っている、あるいは信じているというのが、主知化しまた合理化していることの意味なのである。……こんにち、われわれはもはやこうした神秘的な力を信じた未開人のように呪術に訴えて精霊を鎮めたり、祈ったりする必要はない。技術と予測がそのかわりをつとめるのである。そして、なによりもこのことが合理化の意味にほかならない」[11]と。このウェーバーの主張には、看過し難い深刻な問題が内在しており、それは哲学的かつ経済学的に二側面に及ぶ。本稿では後者の問題に限定して批判的考察を加え、前者の問題性は指摘しておくに留める。

哲学的問題とは、「合理化」と「近代合理主義」とは全く異質の事柄、ないし概念であり、従って「合理化」を「知性化」と単純に等置することはできないということなのである。近代哲学に精通していたG・ルカーチ[12]と『エンチクロペディー』のヘーゲルとに従うと、近代合理主義はデカルトに始まり、スピノザ、ライプニッツを経てカントにいたった。この近代合理主義の特徴は、世界は認識可能であり、この世界をその総体において捉え尽くそうとする、敬意を表すべき偉大な試みを展開した点にある。

しかしながらそのための方法的吟味を加えることなく世界は認識可能だと断定するだけでは、それは独断論である。そこでカントが方法的反省を試みたのだが、その結論は、認識が悟性から理性の段階へと進んで本質を認識対象とし始めると、理性はアンチノミーとしての自己矛盾に陥らざるをえないというものであった。だから認識は、本質としての「物自体」を捉ええず、それゆえ知性は現象の把握に限定された悟性の段階に留まるべきだし、そうせざるをえないという不可知論がその結論だったのであり、カントのこの到達点において、かの偉大な近代合理主義の試みは破産したのである。

以上より、呪術的要素が世界から全面的に一掃されるという意味での「合理化」と、合理化されたこの社会をその総体において認識しえるか否かという近代合理主義の提起した課題とは、全く異質の次元なのである。従ってウェーバーのように、世界からは呪術的要素が全面的に排除されてそれは徹底的に合理化されたのだから、欲しさえすれば、この世界について「どんなことでもつねに学び知ることができる」などと、単純にかつ無反省に主張してはならないのである。とりわけカント哲学を継承する新カント派の立場を自称するウェーバーであってみれば、右の主張は、なすことのできない不可能なそれであったのである。「学び知」りえない認識不能な「物自体」がつねに残るのである。それゆえ、「合理化」と「近代合理主義」とを等置するシュルフターの『近代合理主義の成立』[13]は、その標題からして既に誤っている。これが、哲学的側面からするウェーバーの見解の問題性である。

経済学的には、全ての事柄を予測しえ、予測と技術とによる「現世の合理的支配」[14]が可能だというウェーバーの指摘が問題となってくる。確かに正確な予測が可能な場合もある。しかしそれは、本稿第二章で検討しておいたような、不変の一定条件に堅く制約された経済循環が支配しているような社会に対してだけである。この社会では極大的適応点はただ一つしかないのだから、一定の知的訓練をうけた人間であれば、全ての者がこの唯一無二しかない最適点を予測するからである。しかしこの種の社会はユートピアでしかない。現実は変動常なき社会

であり、「創造的破壊」という烈風の波立ち騒ぐ荒波の下にある。この突風の吹き荒む状況下での個々の経営者にとっては、自己の足下が瓦解しつつあるのに、生起している動乱の本質が読みとり難く、まっすぐに立脚できないのである。これが資本主義経済の現実の姿なのである。このような状況下において、未来に対して正確な予測がなりたつなどと、いとも安易に主張できるのであろうか。

シュムペーターは「硬直価格」を次のように規定している。「われわれは、硬直性を次の如く定義する。すなわち、価格が完全競争の支配しているときよりも需給状態の変化に対して、敏感でないとすれば、その価格は硬直的である[15]」と。その上で彼は、この硬直価格の生ずる原因を次のように捉えている。動乱的事態の下で個々の経営者は、気まぐれな価格変動であればこれを無視し、周期的、季節的変動であればそれを避け、幾多の変動の荒波を貫く長期趨勢線の確認に努めている。ところがこの趨勢線の洞察には時間がかかり、捉えたとしても不正確であり、そのことが価格の敏感な変動に応じれない基本的原因をなしていると。つまり経済の現実においては、危険と不確実性とが充満しているのである。

この危険と不確実性とについては、シュムペーターは更に次のようにも論じている。「保険のきかないリスク（すなわち「不確実性」(uncertainty)）に溢れた世界で行う事業上の決断が大体において予想とは大きくかけ離れた結果を一般的に生み出し、したがってそれが時には余剰利益に、また時には損失につながるという類似した考え方があるが、これは一般的な経験から我々に非常に差し迫ったものとなっている[16]」と。そしてリスクと、それが生ずる蓋然性さえも予測できないために保険による補償さへも期待できないという意味で、危険からは区別される不確実性とに対する研究は、F・H・ナイトの『危険・不確実性および利潤』において頂点に達したと。このように、リスクと、それとは異なる不確実性とが、現実には満ち溢れているのである。このような状況下で予測を行ったとしても、それと結果とは、大多数の場合において大きく乖離しているのが世の常なのである。だから不確実性という深刻な要素を全面的に無視して、未来に対しては正確な予測がなりたち、それに基づく技術的

手段によって、社会を合理的に支配しえるなどと主張するウェーバーの見解がいかに無批判であり、一面的であるがゆえに非現実的なそれだということも納得しえるであろう。

その上で、「予測による社会の合理的支配」という主張がそもそも意味をなすのか否か、そのこと自体が疑わしくなる事態があるのである。条件が不変であり、それに対する極大的適応だけが問題である場合には、解は唯一無二の一つしかないのだから、一定の知的訓練を受けた者であれば、全ての者が同一の事態を予測するということは既述しておいた。その場合には、誰にとっても解は一つしかないのだから、それを予測して社会を合理的に制御することは可能であろう。ところがこの条件に変革をひきおこし、より有利な、より抜本的な新たな事態を開拓しえるという別の観点の下で「予測」という概念を捉え直してみれば、予測による社会の合理的支配という見解が意味をもちうるか否かが、疑問となってこざるをえなくなるのである。

この変革という観点にたっても、現状を洞察し、それに基づき未来を予測することが必要であることはいうまでもない。ところがこの洞察力が人によって巨大に異なり、階級の差によっても、予測する観点が違うはずなのである。従って同一無二の現実を考察したとしても、ある企業者は遠大な展望ある可能性を剔抉することができ、他の企業者は微分的可能性しか把握しえず、単なる事業者は現状維持に汲々とするのである。つまりこの洞察力に基づく未来の予測は、人によって、階級によって巨大な差異があり、唯一無二の解などありえず、この予測には上限がないのである。加えて洞察した可能性を現実化する実行力・意志力にも、人によって深甚な違いがある。その結果として、経済変革に成功したただ一人の企業者の独占状態も生じてきたのである。

この独占状態では、決定的に有利な企業者と遅れをとった事業者との間で、根本的に不平等な競争が展開されているのであり、後者には企業の没落が強制されるのである。この種の経営者にとっては、自己の企業に対してすら、予測によってそれを意のままにする余地など全くない。従って未来に対する予測による社会の合理的支配などと一般的・抽象的に主張しても、何の意味もない。そうではなくて、どの階級の誰が、なにをどの程度支配

しえたのかという問題設定でなければならないのである。

成功した成り上がり者の企業者はブルジョア階級へと上昇しえ、高貴な人士が胸に一物もちつつも、外見的には善人ぶり、優雅に正装して会合するサロンへ参加する特権を手にするのである。しかしながら、創業者の才腕と血の滲むような努力とが子孫へと継承されにくいのも、世の常である。従って金持ちの家系も三代は続かず、「三代にして仕事着から仕事着へ」という英語の諺が妥当する悲劇と悲哀も生じてくるのである。即ちサロンはいつでも人々で満ち溢れ華やかではあるが、それに参加しえる人士はつねに変動している。これが、洞察力、予測力という能力の差異から生じてくる現実の姿なのである。

(1) Max Weber,Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie,in W.L.,S.132.
(2) Ebd.,S.132.
(3) Ebd.,S.132.
(4) Ebd.,S.133.
(5) Max Weber,Die»Objektivität«sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Ekenntnis,in W.L.,S.189.
(6) Ebd.,S.150.
(7) Max Weber,Sozioligiscke Grundbegriffe,in W.L.,S.566.
(8) Ebd.,S.572.
(9) Ebd.,S.572.
(10) Ebd.,S.572.
(11) Ebd.,S.594.
(12) Georg Lukács,Geschichte und Klassenbewußtsein.
(13) Wolfgang Schluchter,Die Entwicklung des Okzidentalen Rationalismus.
(14) マックス・ウェーバー、『儒教と道教』、木全徳雄訳、創文社、四一〇頁。

(15) J・A・シュムペーター、『資本主義・社会主義・民主主義』、前掲訳書、上巻、一六五頁。
(16) J・A・シュムペーター、『企業家とは何か』、東洋経済新報社、一一九頁。

五

本章ではウェーバーの経済理論の静態的性格と、そのことが内包する問題性とを検討していくが、そのためにもまずもって前提的に確認しておきたいことは、ウェーバーは経済理論としては新古典派のそれを採用していたという事実である。このことは既に前章でも確認しておいたし、また少しく詳細にウェーバーの経済理論を考察した研究者は、等しく次のように指摘しているのである。「ウェーバーは殆どなんの制限もなしに、新古典派的限界理論の定義による、経済的諸現象の研究のための理論的基礎を受け入れていた[1]」、「理論史的には主観主義的価値論は、ウェーバーによって社会学のために定式化された行為論的構想に先立って、計画されたものであった。それは、ウェーバーによって社会的なものの全領域に対して用いられた行為論的傾向に対する先駆者であり、見本でさへもあるのである[2]」等々と。

この点を確認しておくのは、単なる好奇心の対象としてではない。そうではなくて、新古典派経済学がマルクス経済学と基本的に異なるのみならず、就中、学説史に対するシュムペーターの総括を通して二度にわたり把握しておいたように、それが、シュムペーターのような、そして私見ではマルクスのような、経済の内部から生じてくる経済の自発的変化、加えて「経済革命」と称するのが最も相応しいような、質的跳躍を伴う「経済発展」を捉え説明する立場にはありえないものであったということを、いま一度、鮮明に想起しておくためなのである。

新古典派理論を採用したことの影響は、ウェーバーにおいて直ちに現れているのであって、それが「経済行為の社会学的基礎カテゴリー」の文字通り冒頭におけるウェーバーの次の言明、「動学に関する問題は、すべて当

面、考慮の外におくこととする」[3]であったのである。経済的変動という場合、それを二類に区別しておかねばならないことはいうまでもない。第一は、マルクス、シュムペーター的な意味での内発的な変化である。つまり変動の原因が、経済内部に位置している場合である。第二は、経済外的要因に起因する経済の変動である。後者の立場からする経済の革命的転換については、ウェーバーは『プロ倫』その他の宗教社会学で十二分に考察しているのである。従って彼が敢えて動学的問題の全面的な排除に言及する場合、この種の動学的現象とは、内発的立場からするそれだと理解すべきであるし、「経済行為の社会学的基礎カテゴリー」の全体からしても、そう解釈するのが自然なことである。

この種の動学的問題が、ウェーバーにおいて、経済現象に対する彼の唯一の本格的な論及と理論的な考察といってよい「基礎カテゴリー」で、全面的に脱落しているのである。このことは、偶然にかくなったのではない。そうではなくて、経済の諸現象の革命的転換・変革を洞察することができず、それへの一義的適応しか考察しえない新古典派経済学をウェーバーが受け入れたことの論理必然的な帰結なのである。

以上のことは、ウェーバーが『支配の社会学』で、「内部からの革命」と並列して指摘している「外部からの革命」の特性にも直ちに連動し、そこに深刻な理論的問題を惹起することになっている。「内部からの革命」とは、意識変革・価値転換の先行する革命のことであり、具体的にはカリスマによる革命のことであって、この側面は本稿は完全に無視するということは既述しておいたところである。

ウェーバーは「外部からの革命」を次のように特徴づけていた。「官僚制的合理化も…伝統に対する第一級の革命的力たりうるし、また事実しばしばそうであった。しかし、それは、原則としては――すべて経済の変革がそのように作用するように――『外部から』、技術的手段によってまず事物や秩序を革命し次いで人間を革命する。すなわち、人間に対する革命は、外界に対する人間の適応能力Anpassungsmöglichkeitを変化させ、場合によっては、合理的な目的と手段との設定によって、人間の適応能力を高める、という意味においておこなわれる

のである[4]」と。つまりウェーバーのいう「外部からの革命」とは、典型的には経済的領域において見出され、その内実は技術革新だというのである。

ところが他面でウェーバーは、『支配の社会学』のいまの引用文にすぐ続けて、「経済とは、物質的な財貨需要の充足を計画的に配慮するための、諸行為の秩序ある永続的な経過[5]」にほかならないと論じて、経済における秩序の第一義的重要性を強く主張していたのである。そしてそのことがウェーバーでは、経済が慣れ親しまれた日常の慣行軌道の中核だということの意味であったのである。

そうだとすると、「外部からの革命」とは、前近代の牢固たる伝統主義に対してはそれを徹底的に粉砕するが如く革命的に作用することはあっても、「革命」という名が冠されているにも拘わらず、近代の経済秩序に対しては、シュムペーター的意味における一大攪乱・動乱を惹起するような類のものではありえないということになる。ということは、ウェーバーの技術革新とは、即座の適応の可能な微分的変動か、大変動であっても、みながみな唯一無二の同一の事態を予測し、この同一の事態を実現しようと努めているがゆえに、あたかも自動的に生起するが如き観を呈する変動かのどちらかだということになる。いずれにしてもこの種の技術革新は、既に第三章で確認しておいた「創造的破壊」という鮮烈な生産革命からは、はるかにかけ離れているのである。

だからこそシュムペーターとウェーバーとを対比して検討した吉田昇三氏とT・ボットモアとは、ウェーバーを次のように批判しているのである。「ウェーバーの分析用具は、……『近代的企業者』の革新機能を明らかにすることには有効ではなかった[6]」、「ウェーバー自身は、『外面からの』革命のはたらき方についてはくわしく分析するところがなかった[7]」、「マルクスとは違って、ウェーバーはこうした『経済的変化』の分析を追求しなかった[8]」等々と。

「外部からの革命」をこの種の類のものとして描きだすことにより、ウェーバーの経済理論には、就中、その利潤論には深刻な難題が生起してきているのである。以下、この点に焦点を限定して考察していく。ウェーバーは

『純益』とはすべての貨幣費用を差し引いた貨幣余剰分である」[9]と定義している。この規定が「企業者利潤は費用超過額である」[10]とするシュムペーターのそれと、ぴったりと符節していることは明らかであろう。この費用超過額を、新古典派経済学に動学を増築することによって説明したシュムペーターに対して、動学的問題を全面的に排除する新古典派の理論にのみ立脚するウェーバーが、かの「貨幣余剰分」の発生する源泉の把握に成功しているか否か、これが問題なのである。加えてウェーバーは、近代的企業者の獲得する利潤を「正当な利潤」legitimen Gewinn とも看做していた。従ってウェーバーの利潤論を検討するということは、「正当な」「正当な」源泉を究めるということでもある。

この分析視角にたつとき、まずもって指摘せねばならないことは、ウェーバーの経済理論の不首尾ということである。彼は『プロ倫』で次のように論じていた。「この禁欲は企業家の営利をも使命たる『職業』と考えることによって、この独自な労働意欲の搾取 Ausbeutung に甘んずるような労働者を必要とした」[11]、「発生期の資本主義は、自分の良心のために経済的搾取 ökonomischen Ausnutzung に甘んずるような労働者を必要とした」[12]と。『一般社会経済史要論』ではもっと端的に、「労働者階級がその職業に対して禁欲的に献身し、資本主義の遠慮会釈のない彼らの利用を承認する場合、彼らはその報酬として永遠の祝福を期待しうることを、この『職業』の概念は教えた」[13]と述べている。

つまりウェーバーは、利潤の源泉を労働者階級に対する資本家の搾取に求めているのである。もちろん利潤の源泉を労働者の無償の剰余労働に求めることはありうる一つの立派な方向であり、それこそ『資本論』のマルクスの採った途であった。しかしながら、新古典派経済学の観点に立脚するウェーバーにとっては、それは論理矛盾であり、自己否定に通ずる途なのである。加えて搾取がその源泉であれば、「正当な利潤」の正当性が否定されてしまうであろう。ウェーバーの経済理論には、こうした不首尾と曖昧さとがいたる所に存在しているのである。

他方ではウェーバーは、「所得の経済的源泉は、多くのケースにおいて、物財および労働の市場における交換布置状態である[14]」と論じてもいる。つまり利得は、市場の交換布置状態から生じてくるというのである。そうしたことが可能であろうか、これが問題となってくる。

その上でウェーバーは更に次のようにも指摘している。企業の収益性は「終局的には、所得事情によって制約され、またそれをとおして消費財の最終消費者による処分可能な貨幣所得……の限界効用の布置によって制約される[15]」と。ウェーバーのこの主張が、企業者の利潤は消費者の所得状態によって制約されているということだけを言っているのであれば、それは自明のことである。彼もまたそんな当たり前のことを主張しているのではない。そうではなくて、彼の言明の真意は、商品価格の最終的決定者という意味での「限界消費者[16]」が、商品をその生産費よりも高い貨幣額で評価して購買するがゆえに、ここにプラスの貨幣差額分が生じてき、この差額分が純益、つまり利潤をなすということなのである。

この貨幣差額分に利潤の源泉を求めることによりウェーバーは、搾取にその源泉を求めないという意味では、確かに新古典派経済学の立場と一致することになる。しかしながらこんな単純な説明で、利潤が解明しえたというのであろうか。M・オブリンスキーは「約四〇年ほど前に、ジョーン・ロビンソンが正当的新古典派の利潤論を考察してみようと決意したとき、彼女は何も見出すことができなかった。私がせいぜい十年ほど前に、同一の主題を初めて研究し始めたときに、ひどく驚いたことには、状況はほとんど変わっていないことを私は見出した[17]」と述べて、近代経済学においては、利潤問題はまさしくいまだ解決されていない「パズル」のような状況にあると内部告白していたのである。このような状況に鑑みても、先のウェーバーのたわいない利潤の説明で満足することはできないのである。

そもそも一方的に販売者の位置にのみたつ企業者というものはありえない。彼は第一に、生活手段たる消費財の買い手として、第二に生産諸要素に対する需要者として、二重に購買者の立場にたつ。その時には彼は、販売

者としての彼に相対したかつての消費者と同じく、これらの財をその生産費よりも高く評価して購買するのであろう。販売者の立場からえられた利得は、購買者という位置において失われ、雲散霧消してしまう。販売者としても購買者としても、どちらにおいても一方的に有利な独占的位置を占めるような者はいないということが、いまのウェーバーの立脚する理論の前提なのである。そしてそのことが、動学的問題を排除するということが、前提的に内包することとなる論理的含意であるということは既に確認しておいた。

以上、ウェーバーによる先の利潤の説明では満足できない以上、我々は彼の経済理論をさらに突っ込んで検討していかねばならない。ウェーバーはシュムペーターと同じく帰属理論を採用して、「価値帰属は生産手段の価値評価である。……生産物の限界効用は、それの経済的生産手段の全体に帰属されるのである」[18]と主張していた。正確を期するならば、「生産手段」ではなく、「生産諸要素」というべきである。この点はともかくも、市場で実現された商品の価格は残りなく生産諸要素の全てへと帰属されると、ウェーバー自身が明言しているのである。従って彼自身のこの主張に依拠すれば、企業家の手元に費用をこえるプラスの貨幣差額分が残る余地は全くなく、だから論理必然的に利潤は零だということにならざるをえないのである。

利潤の源泉というこの問題は、ウェーバーの費用概念を考察してみるとますます奇妙なことになってくる。彼は費用について、「貨幣を使用する場合には、より多くの労働か、欲望の充足か、それとも他の……欲望のために、それを犠牲にするか、といった『限界』問題が生じてくるわけであるが（なぜなら、純粋の貨幣的計算にあっては、『費用』の問題は、けっきょくこのような『限界』問題として、表現されることになるのであるから）[19]」と述べていた。この種の費用概念を「機会費用」とよび、シュムペーターもこの立場をとっていたことは既に確認しておいた。だからT・パーソンズもウェーバーの経済理論に言及した際に、「思いがけない箇所で、このように機会費用に関する明らかに独立した学説が見出される」[20]とのべて、驚きの意を表明していたのである。

費用をこのように捉える立場において、ウェーバーとシュムペーターとは同一だったのである。主観価値説に

立脚しつつこの種の費用概念をとれば、いったいどういうことになるか。それは既に第二章で確認しておいた。即ち、それ以上の生産の拡大は行われないという意味での限界、従って経済的均衡状態においては、限界生産費と限界価格とは一致して、利潤は零となるのである。「機会費用」概念をとる限り、利潤の発生はまたまた説明できなくなる。それでも、均衡点に到達するまでの過程においては、利潤が発生してくるのではないかとも考えられる。しかしそうではないのである。シュムペーターに従うと、限界主義経済学の教える所は、利潤が零の均衡点における商品の価格と、その生産量とだけなのである。

以上、「限界効用の布置状況」による他愛ない利潤説明の背後に存在している、利潤に関連するウェーバーの経済理論を検討してきたが、いずれによっても利潤の把握は不可能であった。新古典派の観点に立脚しつつ、なおかつ利潤を説明しようとすれば、残された途はただ一つしかない。ウェーバーの指摘する「外部からの革命」を生産領域において出来せしめ、費用をこえる価格評価を市場でうける画期的な新商品を開発するか、商品の市場価格以下に費用を劇的に縮減することに成功するかがそれである。即ち市場次元から離れて、生産局面へと移行していかねばならないのである。

いずれにせよ、「外部からの革命」を通して、ウェーバー自身が主張していた「生産行程の経済性[21]」を高めていく方向しかありえないのである。この点ウェーバーの経済理論を注意深く検討してみると、このことを彼自らが一定は認めているのである。「実際、財価格関係における巨大な変動に対する刺激は、概して……(2)通常的には、(a)財生産の技術的諸条件の変更（＝生産費用の変動）……から生じてくる[22]」と。

従って「生産革命」という動態的事態が必要なのである。しかしこの革命は、吉田昇三氏がウェーバーの「外部からの革命」を特徴づけて批判的に規定していたような、「自動的に遂行される[23]」が如きそれであってはならない。そうした変動であれば、競争者はそれに即座に適応しえ、革新担当者にのみ有利な独占状態は保証されえないからである。つまり「生産革命」とは、闇夜を貫く閃光のような、一大攪乱でなければならないのである。

これだけが、ウェーバーの立場にたちつつ利潤を説明しえる唯一の途であったのだが、動態的事態と動学的問題とを全面的に排除しているのが、ウェーバーの経済理論の現実の姿であったのである。

シュムペーターはウェーバーの死に際して、歯の浮くような美辞麗句で飾りたくられた追悼文＝「マックス・ウェーバーの業績」[24]を発表している。しかしそれがシュムペーターの本音であったとは思われない。彼は『資本主義・社会主義・民主主義』において、『プロ倫』におけるウェーバーのマルクス批判の試みを心から軽蔑しているし、『経済分析の歴史』では次のように論じていた。ウェーバーは「実際には少しも経済学者ではなかったのである。〈経済学〉の専門的な交錯せる諸潮流によって攪乱されていなかった雰囲気にあっては、彼を目して社会学者というレッテルをはるのは、明々白々のことがら」[25]であると。まことにその通りである。ウェーバーが疑いもなく第一級の巨匠的研究者であったればこそ、彼が「経済行為の社会学的基礎カテゴリー」その他において、首尾一貫することのない荒唐無稽な諸概念の羅列を展開していることは、極めて残念でならない。

最後に、W・モムゼンの見解にひとこと論及しておきたい。モムゼンは、ウェーバーの資本主義像を「ダイナミックな資本主義」と特徴づける。「ダイナミック」ということを、資本主義が自己の既存の経済的諸条件を深刻なまでに破壊し、そのことによって同時に飛躍的に斬新な新次元を自ら切り開くという意味にとれば、ウェーバーの資本主義観は決してそのようなものではありえず、その逆であることは確認してきた。モムゼンのいう資本主義のダイナミズムとは、資本主義が形式合理的な効率性を極大的に高めるという意味なのである。

その上でモムゼンは、「本質的に無制限な競争」[26]、「市場における無制限自由競争」[26]、「無制限な市場の自由」[26]が存在していて、独占が完全に排除されている状態においてこそ、資本主義はその真のダイナミズムを発揮しうるものとウェーバーが捉えていたと指摘するのである。自己の主張していることの論理的、理論的含意を自覚していない人は、幸せだとつくづく思う。なぜならば、そのような人は、自己の論理的前提からはなしてはならないこと、なすことの不可能な言明を随意に、従って無責任に展開する自由をもっているからである。

独占を排除し、独占の出現をも許さないような「市場における無制限自由競争」とは、既に確認しておいた新古典派経済学の「完全競争」モデルのそれである。そこでの企業行動とは、既存の条件、所与の状況へひたすら最適に適応するだけであり、画期的なまでに斬新な新事態を切り開くなどということはありえなかったのである。「完全競争」モデルに資本主義のダイナミズムを期待することはできず、それはただに非現実的であるのみではなく、効率性の向上という観点からは、ダイナミズムの対極たる劣等なモデルであったのである。

資本主義のダイナミズムを、生産過程における「創造的破壊の過程の噴出と変転」と、そのことによる新市場の飛躍的拡大と市場の深化とに求めるならば、「無制限な市場の自由」からは独占が必然的に発生してくる。ここでも確かに競争は熾烈に展開されてはいるのだが、それは圧倒的に有利な条件を競争の基準とするという、決定的に不平等な条件の下で、だから「無制限」ではなく制約された条件の下で競争が闘われているのである。

モムゼンが「本質的に無制約な競争」が存在するときにのみ、ウェーバーの捉えた資本主義のダイナミズムが真に発揮されると指摘する場合、彼はいったいどちらの立場を念頭においてかく言明しているのであろうか。自己の主張が、暗々裏に前提し内包することにもなる理論的含意をも洞察した上で、責任をもって己れの所説を開陳するということ、このことが研究者に求められる誠実で知的な態度であるであろう。

(1) Bryn Jones,Economic Action and Rational Organisation in the Sociology of Weber,in Sociological Theories of the Economy,edited by Barry Hindess,The Macmllian Press,p.30.

(2) Bader,Berger,Ganßmann,Knesebeck,Einführung in die Gesellschaftstheorie I, Gesellschaft,Wirtschaft und Staat bei Marx und Weber,Campus Verlag,SS.205～206.

(3) マックス・ウェーバー、『経済行為の社会学的基礎範疇』、富永健一訳、中央公論社、世界の名著50、三〇一頁。

(4) マックス・ウェーバー、『支配の社会学』Ⅱ、創文社、四一一頁。

(5) 同書、四一七頁。

(6) 吉田昇三、『ウェーバーとシュムペーター』、筑摩書房、一六〇頁。
(7) 同書、一六四頁。
(8) T・B・ボットモア、『近代資本主義の諸理論』――マルクス・ウェーバー・シュムペーター・ハイエク、亜紀書房、五七頁。
(9) マックス・ウェーバー、『経済行為の社会学的基礎範疇』、前掲訳書、三三七頁。
(10) J・A・シュムペーター、『経済発展の理論』、岩波文庫、下巻、九頁。
(11) マックス・ウェーバー、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、大塚久雄訳、岩波文庫、三六〇頁。
(12) 同書、三六三頁。
(13) マックス・ウェーバー、『一般社会経済史要論』下巻、青山秀夫他訳、岩波書店、二五六頁。
(14) マックス・ウェーバー、『経済行為の社会学的基礎範疇』、前掲訳書、四八四頁。
(15) 同書、三三九頁。
(16) 同書、三三九頁。
(17) Mark Obrinsky,Profit Theory and Capitalism,University of Pennsylvania Press 1983,Preface xi
(18) Max Weber,Grundriss zu den Vorlesungen über Allgemeine("theoretishe")Nationalökonomie,J.C.B.Mohr,1990,SS.36~37.
(19) マックス・ウェーバー、『経済行為の社会学的基礎範疇』、前掲訳書、三三五頁。
(20) T・パーソンズ、『社会的行為の構造』5、木鐸社、二七頁。
(21) Max Weber,a.a.O.,S.53.
(22) Ebd.,S.52.
(23) 吉田昇三、前掲書、一五七頁。
(24) この追悼文は、大庭治夫氏著、『社会科学と価値理念』、文真堂に収録されている。
(25) J・A・シュムペーター、『経済分析の歴史』、東畑精一訳、岩波書店、一七二二頁。
(26) Wolfgang J.Mommsen,The Age of Bureaucracy,Oxford・Basil Blackwell,p.66.

六

ブルジョア社会が、過去数千年にわたって人類が成しとげれなかったことを一朝にして成就し、加えてそこでは絶えざる生産革命が遂行されて、永遠の不安定と不確実に満ち溢れた社会であり、従って「鋼鉄の檻」に対極するそれでもあると捉える『共産党宣言』のマルクスの見解は既に紹介しておいた。シュムペーター、ウェーバーの所説との関係で、マルクスのそれにも一瞥しておかねばならない。

マルクスに関しては、『資本論』第一部の第四篇＝「相対的剰余価値の生産」に注目したい。その冒頭においてマルクスは、絶対的剰余価値生産とは異なり相対的剰余価値生産においては、「労働の生産力を増大し、労働の生産力の増大によって、労働力の価値を低下させ、かくしてこの価値の再生産に必要な労働日部分を短縮するためには、労働過程の技術的および社会的諸条件を、つまり生産様式そのものを変革 umwälzen しなければならぬ[1]」と論じている。経済活動を行うためには、そのための具体的諸条件が前提されるということは、既にシュムペーターから学んだ。相対的剰余価値生産が実行されるためには、この諸条件に巨大な変革が惹起されねばならぬとマルクスはいっているのである。従って彼のいうこの変革は、第一に具体的にはいかなる姿をとって現象してくるのかということと、第二に、この諸条件に生ずる変動を、マルクスが単なる変化ではなくて、「変革」ないし「完全な経済的革命[2]」と称していることの真意はいかんということとが問題となってこざるをえないのである。

第一の問題に関しては、マルクスの指摘する「特別剰余価値」Extramehrwert という概念に注目せねばならない。特別剰余価値とは、競争場裏の下である企業者が経済の諸条件に抜本的変革をひきおこし、「この商品の個別的価値は、いまやその社会的価値よりも低い[3]」ということからひきだされる特別の剰余価値のことである。その限りにおいて「特別剰余価値」が、シュムペーターの「企業者利潤」と全面的に符節するものであることは明

らかなのである。

その上でマルクスは、画期的な新機軸の開発と採用とに成功した企業者について次のように述べている。「機械経営が一種の独占状態にあるこの過渡期のあいだには、利得は途方もなく大きく、そして資本家は、この『青春の恋の時代』を、労働日のできる限りの延長によって、もっとも徹底的に利用しようとする。利得の大きいことが、いっそう多くの利得への渇望を激しくする」[4]と。マルクスのこの主張が、再びシュムペーターのそれと軌を一にしていることは明らかである。シュムペーターの企業者利潤には「真正の独占的要素」があり、この点で彼は、新古典派的「完全競争」モデルからは懸け離れていたのである。マルクスも、新機械を採用した資本家は「一種の独占状態」にあるといっているのである。従ってここでも、両者の見解は一致している。

更にマルクスは、「だが他面、新たな生産様式が一般化し、したがってまた、より安く生産された商品の個別的価値と社会的価値との差別が消滅するやいなや、かの特別剰余価値は消滅する」[5]とも指摘している。マルクスのこの主張が三度シュムペーターのそれと同一なのであって、シュムペーターの生産革命は、競争経済の圧力の下では短命だったのである。新生産方法が決定的に有利なことが判明すると、それへの即座の適応は不可能だとしても、同業者はこぞってこの新方法を模倣していく。その結果、遅かれ早かれ新生産方法は社会一般に普及し、かの企業者にのみ有利な独占状態は消滅してしまうのである。そうであるならば、「創造的破壊」は陸続として敢行されねばならない。その限りにおいてのみ、経済は資本主義だからである。新たな可能性はいつでも存在している。否、一つの変革に成功することにより、無数の可能性が切り開かれてくる。従って絶えざる企業者の簇生は可能なのである。

以上より先の引用文において、経済活動のための諸条件に抜本的な変革がおこるし、また生起させねばならないとマルクスが主張する場合、この変革は具体的にはシュムペーターのそれと全く同一だったのであり、競争の圧力の下で、ある資本家が他者の追随を許さぬまでの生産革命を実行するということだったのである。マルクス

はこのことを『賃労働と資本』では、競争において他者をだしぬくことだとも述べている。「資本家は、古い機械と分業のかわりに新しい、より高価ではあるがより安く生産する機械と分業をやすみなく採用し、競争が新しいものを旧式にしてしまうまでまたないというやり方で、たえず競争をだしぬこうとする」[6]と。生産革命は具体的には、同業の競走者を「だしぬく」ために、敢えて遂行されているのである。

更にマルクスは、『直接的生産過程の諸結果』では、次のような実に興味深い指摘を行っている。価値法則が社会を貫徹するということは、具体的には「それは、他方では、個々の資本家は、この法則を破るために、また彼自身の利益のためにこの法則を欺くために、彼の商品の個別的価値をその社会的に規定された価値よりも低くしようとするのである」[7]と。峻厳な法則には徹底的に適応するしかなく、そうでなければ淘汰を蒙ると一面的に主張するのがウェーバーであった。別の法則に従いながら、旧来の法則を破壊し欺き、そのことにより新たな画期的新次元を開拓すると捉えるのがマルクスだったのである。即ち、経済活動のための既存の前提条件は抜本的に変革されて、古い慣行の軌道は破壊され、新軌道が設定されていくのである。

このようにみてくると、資本主義の動態的姿態の把握という点に関しては、マルクスとシュムペーターとは見解を全面的に一致させていたようにもみえてくる。その通りなのだが、にも拘わらず両者の間には決定的差異も存在しているのである。マルクスは、「相対的剰余価値の生産」篇において次のように述べていた。「個々の一資本家が労働の生産力を増大させることによって例えば肌衣を低廉化させるばあい、労働力の価値を低下させ従ってそれに応じて必要労働時間を低下させるという目的が必ずしも彼の頭に浮かんでいるわけでは決してないのであって、彼は、彼が結局においてこの結果に貢献するかぎりでのみ一般的剰余価値率の増大に貢献するのである。資本の一般的で必然的な諸傾向は、かかる傾向の現象諸形態から区別されるべきである」[8]と。

つまりこういうことである。個々の資本家の直接的動機は、生産力を発展させて同業の競走者をだしぬき、特別剰余価値を獲得することにあるのだが、その過程は同時に、資本家の意図とは無関係に生活手段の価値を低下

させ、従って労働力の価値も低下させ、定められた一定労働時間内においても、剰余労働時間の延長ということになるのである。その上で、主観的動機の次元と、それから生じてくる意図せざる客観的過程とを区別し、後者こそが事態の本質であり、前者、つまり具体的競走の過程は本性の現象形態であって、後者を捉えることが前者の把握に通ずると看做し、競走と特別剰余価値との分析を、マルクスはさしあたりそれ以上深くは追求しなかったのである。

この点ではマルクスはヘーゲル主義者であった。ヘーゲルは「理性の狡智」について次のように論じている。「一般理念の実現は、特殊な利害にとらわれた情熱ぬきには考えられない。特殊に限定されたものとその否定から一般理念は生じてくるからである。特殊なものがたがいにしのぎをけずり、その一部が没落していく。対立抗争の場に踏みいって危険をおかすのは、一般理念ではない。一般理念は、無傷の傍観者として背後にひそんでいるのです」[9]と。このように、行為論的見地を十分に自覚しつつもそこには留まらず、そこから結果してくる意図せざる客観的過程をこそ重視する点で、マルクスはシュムペーターと決定的に異なっていたのである。シュムペーターにおいては、そもそも剰余価値生産なるものは存在しない。あるのは、生産革命を惹起して他者をだしぬくことによってのみ発生してくる「特別剰余価値」＝「企業者利潤」だけである。また他者をだしぬくという主観的動機が重要なのだから、一般的利潤率の成立ということも否定される。

第二に、経済の諸条件に生ずるこの変動の特性が問題となる。『資本論』の「相対的剰余価値生産」篇では、次のような表現をいたる所で見出すのである。「労働過程の対象的諸条件における革命」、「生産様式の変革」、「交通＝および運輸手段の革命」、「新生産方法の採用」、「社会的経営様式の変革」等々がそれである。『直接的生産過程の諸結果』ではマルクスは、「資本のもとへの労働の実質的包摂とともに、生産様式そのものにおける、労働の生産性における、そして資本家と労働者との関係における完全な（しかも不断に継続して繰り返す）革命が生ずる」[10]とさえも論じていたのである。

更に『経済学批判要綱』ではマルクスは、シュムペーターを彷彿として想起させるかの如くに、資本は「これら一切のものに対して破壊的であり、またたえず革命をおこし、生産力の発展、欲望の拡大、生産の多様性、自然や精神力の利用と交換をさまたげるいっさいの制限をうちこわしていく」[11]とも述べていた。この「創造的破壊」というマルクスとシュムペーターとに共通する発想は、「創造は破壊的であり、破壊は創造的である」[12]と主張する、『大論理学』におけるヘーゲルの偉大な洞察に源を発しているように思えてならないのである。

これらの引用文において見出される「変革」、「革命」という用語は、封建制から資本主義への、絶対主義から民主的近代社会への革命的転換といった場合のそれとは明らかに異なる。革命は資本主義という同じ体制の内部で生じているのである。この変革をマルクスが敢えて「革命」とよんでいるのは、資本主義という同じ体制のなかであっても、経済の既存の前提条件に質的断絶を伴うまでの一大攪乱が生じているからなのである。しかもそれは、経済の内部から現れてくる自発的変化でもある。変動をこのように捉える点で、マルクスとシュムペーターとは再び一致するのである。

マルクスの競争とはシュムペーターの場合と同様に、この「創造的破壊」という状況の下で、従って決定的に不平等な条件の下で敢行されているのであり、「完全競走」モデルの想定するそれとは根本的に異なる。にも拘わらずマルクスも「自由競争」という概念は使用しているのであって、だからマルクスにとり「自由競走」とは、資本が利潤率の低い部門から高い分野へと自由に移動しえ、この自由な資本移動の結果、利潤率の均等化が、それゆえ平均利潤率と生産価格とが成立してくることだということになる。

マルクスとシュムペーターとの関係で第三に注目せねばならないことは、マルクスが『直接的生産過程の諸結果』で、独自に一章をもうけているその章の標題＝「資本主義的生産は独自に資本主義的生産関係の生産および再生産である」という視点が有する意義如何という問題である。『直接的生産過程の諸結果』は、単に商品の生産だけでもなく、剰余価値または利潤の生産だけでもなく、一方に資本家を、他方に賃労働者を、従って資本主

義的生産関係の生産と再生産とでもあるのである。この視点がシュムペーターとの関係で有する意義、これが第三の問題である。

マルクスは、この視点は「資本主義的な諸観念そのものにとらわれているブルジョア的な経済学者たちの見解とは本質的に違う見解であって、たしかに彼らは、どのようにして資本関係のなかで生産がおこなわれるか、を見てはいるが、しかし、どのようにしてこの関係そのものが生産されるか、また同時にどのようにしてこの関係のなかでその解体の物質的な諸条件が生産されるか、したがってまた、経済的発展の、必然的な形態としての、この関係の歴史的な存在資格がどのようにして除去されるかを見てはいないのである」[13]と論じて、この観点の有する独自な深い意義に言及していたのである。

この引用文でマルクスは二つのことを主張している。第一は、資本関係を従来の経済学者のように、不動の外的前提条件、従って与件として扱ってはならぬといっているのである。第二に、資本関係は直接的生産過程がその結果として生産し再生産していると捉えると、「完全な経済的革命」をひきおこして、豊かな社会のための前提条件を創出する資本主義経済の歴史的存在資格を把握しえるのみではなく、資本主義的生産様式の解体の、従って新たな社会の出現のための諸条件の揃いつつあることの洞察にも通じていくといっているのである。

まず第一の主張の意義から検討していきたい。この点ではいま一度、シュムペーターの『経済発展の理論』の第一章の標題＝「一定条件に制約された経済の循環」が想起されねばならない。そこでは資本関係を含む一定条件は、経済の不変の外的前提条件であり、従って与件であった。そしてこの不変の前提条件に最適に適応した場合に生じてくる静態的経済循環を把握の中心としたのが古典派経済学であり、またそれを理論の礎石としたマルクスの経済学でもあったと、シュムペーターは指摘していた。今や明らかなことは、彼のこの見解は一部は正しく、一部は誤謬だということである。

マルクスが、ブルジョア経済学者たちはたしかに「どのようにして資本関係のなかで生産が行われるか、を見

てはいる」と言及している場合、彼はシュムペーターと同一の見解を主張しているのである。即ち古典派経済学者は、資本関係を不動の外的前提条件として、従って理論に内部化されることのない与件として扱っているのである。そして資本主義的生産関係の永遠化に通ずるこの不動の前提の下で、生産がいかになされているかということだけを、一面的に洞察しているのである。それゆえこの限りでは、マルクスの古典派経済学批判の見地とシュムペーターのそれとは全く軌を一にしているのである。

しかしながら、古典派のこの立場がマルクスのそれでもあったと看做すシュムペーターの見解が完全に誤謬であることは、最早や明らかであろう。マルクスでは、資本関係は直接的生産過程によって生産され、再生産されるという具合に、その定在の必然性が捉え直されているのである。だから資本関係は、マルクスでは最早や与件ではなくて、理論に内部化されているのである。そのことは、直接的生産過程のための前提が結果へと転化し、この結果が新たな前提となって、再度の生産＝再生産過程が可能となるということを明らかとしたということでもある。このようにしてマルクスでは、連続的再生産過程を、それも拡大再生産としての蓄積過程を、その過程に即して追跡することができていたのである。

マルクスにとり経済とは、このように自己再生産構造を内包し、自力で自己を展開する「自己更新の原理」[14]を包含する生命ある事態として捉えられていたからこそ、後年のシュムペーターはマルクスのこの根本的な考え方をあまりにも適切に、次のように定式化していたのである。「それは、これらの類型の現実的連続の理論、ないしは各瞬間に自ら後続のものを規定するような状態を生みつつ、自力で歴史的時間のなかを進行するがごとき経済過程の理論という考え方なのである」[15]と。

「自力で歴史的時間のなかを進行する」経済過程を理論化したのがマルクスの立場だと看做すシュムペーターのこの特徴づけは、驚愕に値するまでに適切なそれなのである。マルクスの理論は、時間要素を含む四次元の世界なのである。『資本論』は、変革と革命という動乱の歴史を理論化し、理論研究と歴史研究とが一致するという

文字通り芸術的作品であったのである。マルクス理論に対するシュムペーターのこの特徴づけ以上に適切なそれを、私は知らない。彼のマルクス理解の尋常一様なものでないことを再認識せざるをえない。と同時に、『経済発展の理論』段階におけるシュムペーターのマルクス理解が誤謬であることも明らかであろう。

このように直接的生産過程の終わりにおいて、資本と賃労働とが登場してくるし、再登場せざるをえないということは、マルクスにとり「過程そのものの筋書き」[16]なのである。資本関係の生産と再生産とを、「過程そのものの筋書き」と捉える立場とそうでない見解との間には、雲泥の差がある。資本の再生産過程が単純再生産過程ではありえず、剰余価値の追加資本への転化、即ち蓄積過程であり、中・小規模の企業を吸収合併する集中過程であり、巨大株式を発行して莫大な資本を集積する「社会的経営様式の変革」の過程でもある限り、かの経済の前提条件もつねに変化せざるをえず、加えて飛躍的なまでの変動、つまり変革・革命を蒙むらねばならないということも、「過程そのものの筋書き」なのであり、まさしく資本主義生産機構それ自体が要請していることなのである。

ところがシュムペーターではそうはならないのである。彼においても、かの経済のための前提である一定条件に巨大な変革と攪乱が生じねばならないのであって、この点はマルクスと同一である。しかし「生産革命」が出来するということは、「過程そのものの筋書き」でもなければ、資本主義的経済機構の必然的な要請でもない。そうではなくて、「企業者」という優れて衆に秀でる異能者がたまたま現れて、この特定の個人が、闇夜を貫く稲妻のごとき鮮烈な一大攪乱を、かの与件に対して惹起するのである。従って企業者は、なぜそのような試みを敢えて企てるかというその動機が問題となってくる。

この点に関してシュムペーターの列挙する動機は、「私的帝国」の建設、「自己の王朝」の樹立、「勝利者意志の満足」、「家族に対する配慮」等々であった。即ちこれらの動機は、いつの時代、どのような社会においても多かれ少なかれ存在し、見出されるものなのである。ところがシュムペーターが企業者の攪乱作用によって捉え説

明しようとした現象と問題とは、利潤と利子の存在とその説明であり、それらを所得として受けとる「企業者」と「資本家」という経済主体を理論体系内に位置づけるという問題であり、景気変動、恐慌、そして大量失業といった動学的現象であった。これらの現象は資本主義経済に固有なものであり、資本主義を独自に特徴づけ、それゆえ他の経済体制からそれを截然と区別する、資本の種差をなすものなのである。

説明されるべき現象と動機との間には、巨大な落差と乖離とがある。だからこそE・A・カーリンは、シュムペーターを次のように批判するのである。「企業者の動機についてのシュムペーターの分析に随伴している唯一の困難は、一方でこの類型は、内因的で資本主義的な経済変動に寄与するものとして設定されているのに、提起された行為のための動機は、いかなる体系にも適用可能であるということである[17]」と。

他方マルクスにおける経済という現実は、昨日が今日の、今日が明日の諸条件を措定しつつ、過程のなかを進行しつつある経済なのである。加えて「完全な経済的革命」が可能となるように、諸条件に自ら根本的な変革をひきおこすという具合に、新たな条件を措定し続けている過程でもあるのである。そのことを通して、「自力で歴史的時間」のなかを行進しつつある現実なのである。マルクス自身の言葉でいえば、「今日の社会は固定的な結晶物でなく、変化しうる・たえず変化の過程にある有機体[18]」なのである。「固定的結晶物」という用語で、ウェーバーの「鋼鉄の檻」が想起されるべきであろう。しかし資本主義はそんなものではない。その上でマルクスの理論は、資本主義のこのたえざる変化の過程を押さえれるのである。そしてこの過程のなかに、資本主義経済がどこから来てどこへ行こうとしているか――ウェーバーのいわゆるwovon・wozu問題――をも解明するのである。さらにそこに、資本主義経済の栄光と可能性、矛盾と問題性との拡大と深化とをも捉えるのである。

この現状分析に基づいて、それにのみ基づいて、明日の展望をも提起するのである。即ち未来の展望は、現実に沈潜し、現実を徹底的に分析することのなかに求めるのであって、そこを離れて、預言者やカリスマの呈示する啓示や理念に期待することがあってはならないのである。ヘーゲルはいう、「存在するところのものを概念に

おいて把握するのが哲学の課題である。……なんらかの哲学がその現在の世界を越え出るのだと思うのは、ある個人がその時代を跳び越し、ロドス島を跳び越えて外へ出るのだと妄想するのとまったく同様におろかである」[19]と。ロドス島を跳び越え、現実を離れて、有るべき世界、従って当意としての理念を創出したとしても、それは空理・空論・ユートピアでしかない。

(1) Karl Marx,Das Kapital,Marx Engels Werke,Bd.23,S.334.
(2) K・マルクス、『直接的生産過程の諸結果』、国民文庫、一四八頁。
(3) Karl Marx,a.a.O.,S.336.
(4) Ebd.,S.429.
(5) Ebd.,S.337.
(6) K・マルクス、『賃労働と資本』、国民文庫、六六～六九頁。
(7) K・マルクス、『直接的生産過程の諸結果』、一〇八～一〇九頁。
(8) Karl Marx,a.a.O.,S.335.
(9) ヘーゲル、『歴史哲学講義』、長谷川宏訳、岩波文庫、上巻、六三頁。
(10) K・マルクス、『直接的生産過程の諸結果』、一〇四頁。
(11) Karl Marx,Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie,Dietz Verlag,S.313.
(12) G.W.F.Hegel,Wissenschaft der Logik II,Suhrkamp Verlag,SS.220～221.
(13) K・マルクス、『直接的生産過程の諸結果』、前掲訳書、一四八～一四九頁。
(14) Karl Marx,Grundrisse,S.920.
(15) J・A・シュムペーター、『資本主義・社会主義・民主主義』、東洋経済新報社、上巻、八一頁。
(16) Karl Marx,Das Kapital,Marx Engels Werke,Bd.23,S.603.
(17) Edward A.Carin,Schumpeter's Constructed Type-The Entrepreneur,Kyklos IX,1956,p.38.
(18) Karl Marx,Das Kapital,Werke,Bd.23,S.16.

(19) G.W.F.Hegel,Grundlinien der Philosophie des Rechts,Felix Meiner Verlag,S.16.

七

シュムペーターとマルクスの動学理論を検討しつつ、近代社会の到達点としての「鋼鉄の檻」というウェーバーの見解を批判的に考察してきた。今や、この主張の特性を総括しえる段階にある。

経済活動のための前提条件に何らの変動もおこらず、従ってそれを単純に不変と仮定し、これに対する「徹底的な適応」だけを問題とすれば、確かに変革不能な「鋼鉄の檻」という結論が必然的に生じてくる。前提条件が変動していても、それへの即座の適応が可能であるならば、同じ結果が生じてくる。シュムペーターはこの事態を、「事物の必然性」によって制約され、「鉄鎖」でもって、堅く慣行の循環軌道に経済主体を束縛しているような状態と特徴づけていた。そしてこの事態には、いかなる変動の余地も可能性さえも欠けていることを次のように表現していた。「かくして経済において、諸条件に対する適応が問題となり、客観的必然性を変化させることなしに単にこれに適応することが問題となる限り、個人に推薦しうる行動は、実際、唯一無二な確定的なものであって、この行動の結果は、与えられた諸条件が不変にとどまる限り、不変にとどまるであろう」[1]と。このように先の視点に立脚する限り、いかなる変動も変革も絶対に不可能な「鋼鉄の檻」という事態が、論理必然的に結論されるのである。

と同時に、この「鋼鉄の檻」、「隷従の容器」という帰結が、深く鋭い洞察に基づいた独自な見解であるのではないことは、シュムペーターの学説史に対する総括を二度にわたり検討することによって明らかとしてきた。その前提条件には深刻な革命的変動が惹起されているのであり、そこから生じてくる動学的事態を捉えようとする視点こそ、シュムペーターとマルクスとのわずかに二人だけに特有なものであって、従ってこれこそがオリジナ

ルな観点だったからである。シュムペーターはこの点において、自己の依拠している新古典派経済学を次のように鋭く内部告発している。「把握すべき本質的な点は、資本主義を取り扱っているさいに我々が発展的な過程を取り扱っているということである。これほど明白な事実、しかもはるか昔にカール・マルクスによって強調されていた事実を見逃すような人があるのは、まったくおかしいと思われるかもしれない。しかるに、近代資本主義の機能について数多くの命題をもたらしたかの断片的分析は、頑強にこの事実を否定しているのである」[2]と。

従ってウェーバーの「鋼鉄の檻」という見解は、何もオリジナルなそれであったのではなく、自己の依拠している前提を論理的に突きつめれば必然的にいたりつく結論であり、圧倒的に多くの研究者が歩んだ途でもあったのである。だから諸条件への「徹底的な適応」という同一の観点に立脚したシュムペーターの『経済発展の理論』の第一章も、「鉄鎖」で堅く縛られた変革不能な経済循環という、ウェーバーと同一の結論に到達していたのである。

しかしながら、この結論は非現実的なのである。現実の資本主義経済においては、前提条件には一大攪乱が惹起され、そのことにより「創造的破壊」の烈風が吹き荒れ、「完全な経済的革命」が陸続として引き起こされているという、動乱的事態だからである。これが資本主義経済という現実の姿であり、各企業、各経済主体は、この全面的に不平等な状態において、熾烈な競争をせねばならないという運命におかれているのである。

この現実のダイナミックな過程は、ウェーバーの「目的合理的行為」という類型をさらに二分し、諸条件への、そして法則への一義的適応だけが問題である受動的行為類型とは根本的に異なる、「創造的反応」という新たな行為類型を設定すれば捉えれたはずなのである。ウェーバーが「社会学の基礎概念」で、行為の諸類型を理念型的に純化して考察すれば、それは目的合理的行為、価値合理的行為、伝統的行為、感情的行為の四類型しかありえないと主張する場合、この指摘は何の根拠もない断定なのである。少なくとも、「創造的反応」といういま一つの類型が付加されねばならない。この類型が欠如しているために、ウェーバーでは「外部からの革命」という

概念が、「革命」という名が冠されているにも拘わらず、実に中途半端で意義の少ないカテゴリーに堕していることも洞察しておいた。

あるいは動乱的事態にある資本主義の現実は、マルクスのように、「完全な経済的革命」を出来しつつ、自力で歴史的時間のなかを進行している過程にあるものとして捉えても、押さえれたはずなのである。「過程の理論」のウェーバーにおける完全な欠如ということに関しては、T・ボットモアの「マルクスとは違って、ウェーバーはこうした『経済的な変化』の分析を追求しなかった」というウェーバー批判を紹介しておいた。この点では、吉田昇三氏も次のようにウェーバー理論を批判していたのである。「ウェーバーの資本主義発展過程の考察には、近代資本主義成立期の理論とトラスト化資本主義段階の理論とがあって、中間段階の考察が欠けているという印象をうける」[3]と。

発生期と独占段階の理論とがあって中間段階のそれがないということは、両極の理論は単なる静態的な比較類型論でしかないということである。従って発生期の資本主義がいかにして確立期のそれへと移行したか、自由競争段階がどのようにして独占段階へと、ウェーバー自身の言葉でいえば「高度資本主義」へと転化したのか、この移行と転化に関する過程の理論がウェーバーでは欠如しているということである。いわんやこの高度資本主義が更にいかなる方向に進展しつつあり、どこえいたりつこうとしているのかという、後のマルクス主義者や『資本主義・社会主義・民主主義』のシュムペーターが敢えて試みた考察など、ウェーバーには全く存在しないということでもある。この点からもウェーバーは、資本主義という現実をそのリアールな姿において具体的に捉えることができなかったのである。

以上の考察に基づけば、ウェーバーが指摘する近代の根源的病理、近代化の悲劇的パラドックスとしての「鋼鉄の檻」＝「絶対的物象化」[4]という事態は、現実には実在しもしないし有りもしない虚構なのである。それゆえ「鋼鉄の檻」という事態の克服に際しては、それを客観的に実在する状態として受けとめた上で、いかにすれば

それを突破しえるのかという具合に問題を設定してはならないのである。それでは問題は解決しないのであって、ウェーバー理論による現実把握はなぜに虚構に陥るのか、その理論的弱点はどこにあるのかという課題設定でなければならないのである。

「鋼鉄の檻」という見解との関連で最後に指摘しておきたいことは、以下の二点である。呪術から解放され、全面的に合理化された社会は、科学的予測と技術とによって支配しえるという、近代的理性へ全面的に信頼をおいているかの如き主張をウェーバーは一方で展開していた。ところが他方で「鋼鉄の檻」とは、この理性による支配が崩壊して、ルカーチ的にいえば『理性の破壊』とよぶのに最も相応しい事態なのである。即ちそこでは人間は理性を喪失し、魂のない死んだ物象的事態によって一方的に規定されるという、「隷従の容器」の如き絶望的な状態なのである。ウェーバーという同一の人物によってなされたこの二類の主張の間には巨大な落差があり、従ってそれは深刻に問題だということは既に言及しておいた。これが最後に指摘しておきたい第一の問題である。

二つの主張の間のこの巨大な乖離も、ウェーバーの理性概念を検討してみれば必然的なことなのである。ウェーバーは「客観性」論文で、「そのときどきに意味ぶかいものをとらえようと思えば、なしにはすまされないその概念体系は、どれも、現実界の無限の豊富さをくみつくすことはできるものではない」[5]と断じていた。つまり概念体系を用いた現実把握においては、認識不能な「物自体」が必ず残ると明言しているのである。カントに立脚するウェーバーにとり、この結論は自己の前提から必然的に帰結するそれなのである。この前提を保持する限りウェーバーは、『職業としての学問』において、「欲しさえすれば、どんなことでもつねに学び知ることができる」[6]などとは、いってはならないし、そもそもそう主張することは不可能だったはずなのである。

加えて対象の「学び知り」方も問題となってくる。諸条件と法則とへの徹底的な適応という一面的な、だから抽象的な側面だけを学び知るのではなく、諸条件を変革し、新次元の法則を洞察し、それらに基づいて行為すれ

ばいかなる事態が切り開かれてくるかも学び知らねばならないのである。更に諸条件をいつまでも外的前提条件として、それゆえ不動の与件として扱うのではなく、それを理論に内部化して、現実を再生産の過程にあるものとして、それも螺旋的に膨張しつつある拡大再生産にあるものとして、この過程を捉える視点をも学び知らねばならないのである。ところがこれらの観点が全て欠落しているのが、ウェーバーの方法論、認識論の実態なのである。つまりこのような弱点多き方法論に依拠しているウェーバーの理性概念は強靱さを欠き、中途半端であり、つねに一面的であるがゆえに抽象的なのである。従ってこうした軟弱な理性概念は、いとも簡単に理性の破壊状態へと急転するのであって、それゆえ先の二類の主張の間の落差も別に驚くべきことではないのである。

最後に論及しておきたいウェーバーの問題性は、彼のいわゆるエートス論についてである。ウェーバーが「世界宗教の経済倫理」の序論で、次のように論じていたことは周知の事実である。「人間の行為を直接に支配するものは、利害関心（物質的ならびに観念的な）であって、理念ではない。しかし『理念』によってつくりだされた『世界像』は、きわめてしばしば転轍手として軌道を決定し、そしてその軌道の上を利害のダイナミックスが人間の行為を推し進めてきたのである。つまり、『何から』wovon そして『何へ』wozu『救われる』ことを欲し、また――これを忘れてはならないが――『救われる』ことができるのか、その基準となるものこそが世界像だったのである[7]」と。

利害状況への新たな方向づけと、経済の慣行の軌道を抜本的に転換して新軌道を設定するに際しての、理念とそれが内包する世界像との、能動的にして変革的な役割という周知のウェーバーのこの命題が、マルクスの史的唯物論に対する批判として措定されたということは、確かな事実ではある。しかしながら、この命題をストレートに史的唯物論批判として受けとり、かつそう解釈してはならないのである。そう看做し、この点にこの命題の直接的意義を見出す場合には、マルクスに対するウェーバーの無理解が露見するだけでしかない。

ウェーバーが経済理論としては新古典派のそれを採用していたという事実は確認しておいた。加えて新古典派

経済理論は、経済の内部から生ずる経済の前提条件の根本的変動を把握しえるような理論ではなく、不動の前提条件への一義的適応の結果をのみ考察する点に特徴のある理論であるということも洞察しておいた。そうだとすると、新古典派の理論に立脚しつつ、なおかつ経済の変動、それも前近代の伝統主義的経済から近代の合理的資本主義経済への革命的転換といった変動を捉え説明しようとすれば、経済の外部にその原因を求めるしかないということになる。ウェーバーはこの役割を担う要因を理念に、とりわけ経済の外部に位置し、端的にいって「非経済の力」そのものであるカリスマと預言者とによって創造された斬新な新理念と、その中核に位置する「世界像」Weltbildとに求めたのである。

従って理念による利害状況への方向付けというウェーバーの命題の意義は、第一義的には史的唯物論批判として解釈してはならないのである。そうではなくて、経済の革命的転換を把握することのできない新古典派経済学の補完として理解すべきなのである。このように捉えることによってこそ、かの命題も首尾一貫した意義を見出すことができるし、wovon・wozu問題も生きてくるのである。

しかしながらマルクスの捉える経済とは、経済自身が自己の前提条件に自ら革命的変革をひきおこしつつ、自力で歴史的時間のなかを凱旋行進しつつあるような、動的過程にあるそれであった。経済は自己の方向を自力で切り開いていくのであって、この点の役割を宗教理念や世界像に期待する必要は全くなかったのである。即ちこの進展の過程のなかに、資本主義経済がどこからどこへ展開しつつあるかも洞察しようとするのであって、転轍手としての方向性付与というwovon・wozu問題においても、理念を必要とすることはありえなかったのである。

新古典派経済学の理論的弱点を補完するものとしてのエートス論の基本的役割を理解することなく、それを理論的前提の全面的に異なるマルクスの史的唯物論に対する批判へと転用することは、誤謬に通ずる途なのである。史的唯物論を批判してはならないといっているのではない。そうではなくて、史的唯物論批判という点にエートス論の意義を見出す以前に、新古典派経済学とマルクス経済学との理論上の特質の基本的差異を洞察してお

くべきだといっているのである。その上で、エートス論はどちらの理論に対して意義を有し不可欠なものであるかをまずもって確認しておくべきだといっているのである。この点の吟味を欠いたまま、エートス論を史的唯物論批判としてストレートに位置づけると、動学としての『資本論』の理論的独自性も、新古典派との関係において有するエートス論の意義も、全て看過されることになるのである。この問題は、別稿を用意して本格的な検討を加えることとし、本稿では問題性を指摘しておくにとどめる。

（1）J・A・シュムペーター、『経済発展の理論』、岩波文庫、上巻、一〇四頁。
（2）J・A・シュムペーター、『資本主義・社会主義・民主主義』、東洋経済新報社、上巻、一四九頁。
（3）吉田昇三、『ウェーバーとシュムペーター』、筑摩書房、一一六頁。
（4）Max Weber,Wirtschaft und Gesellschaft,Fünfte Revidierte Auflage,1 Halbband,J .C.B.Mohr,S,383.
（5）Max Weber,Die»Objektivität«sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erenntnis,in W.L.,S,594.
（6）Max Weber,Wissenschaft als Beruf,in W.L.,S,594.
（7）マックス・ウェーバー、「世界宗教の経済倫理序論」、大塚久雄訳、『宗教社会学論選』、みすず書房、五八頁。